
-full color's-

ノビタニアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- full color's -

【Nコード】

N2873D

【作者名】

ノビタニアン

【あらすじ】

夏が嫌いだった。同じ毎日が嫌いだった。みんなと同じが嫌いだった。そんな自分が一番嫌いだった。僕が14歳になった夏の終わり。この教室に一人の転校生がやってきた。少年と少女。二人が心を紡いだ、淡い色の記憶。

第1色目「夏が嫌い」

夏が嫌い。

太陽が僕のすぐ真上にあつて、いつか落ちてくるんじゃないか、と恐くなる。

目の前の景色がユラユラ揺れてバックネットから体育館の距離感がわからなくなる。

夏は楽しい。夏を楽しむ。

テレビが、雑誌が、漫画が、周りがそう煽るから夏つてのは楽しいものだと勘違いしちゃうんだな。

まだ夜が明けないうちからセミが大合唱を始めて、必ずと言っていいほど目が覚める。この蒸し暑い中、やっと寝付けたと思ったらこれだ。扇風機一台で猛暑と戦う僕には辛過ぎる。

朝早くにセミに叩き起こされた僕は、そのまま眠れず、じめじめした朝方の空気に嫌悪感を抱きながらベッドの中で起床時間の7時を迎えるんだ。

そして灼熱の日差しを浴びて汗だくになりながら学校に行く。

夕方は部活で夜遅くまで練習。夏の公式戦があるので先輩達の後ろで延々球拾いを続けるだけ。

夏休みなんてあつたもんじゃない。朝から晩まで軟球を拾い続けるんだ。練習できなかった分、僕ら下級生は夜から本格的な練習を開始する。中学生の部活動にしては相当キツイんじゃないかと思う。

あっさり一回戦で負けた先輩達は早速髪の毛をバレない程度に染めて僕らの練習をヘラヘラしながら見に来る。一通り偉そうなアドバイスを僕らに投げ捨てて、そのお礼に僕らは菓子パンを奢る。それが新チームになった二年生の宿命、といった感じで周りは認識していた。

ただ学年が一つ上っただけで、それが可笑しかったり、腹が立ったりで、それなりに不愉快な夏つてのを過ごしていた。

何にもない毎日。

同じ毎日。

形にはまった事が起こって、台本通りに進んでいく。

きつと来年も、僕は夏が嫌いって言うと思う。

きつと。絶対。

9月1日。

セミの目覚ましによつて寝不足気味の頭は、回転の仕方がわからず、右斜め前に座っている女の子の胸元をとりあえずは凝視せよと命令を送ってきた。

女子は大体、新学期に話す話題といえは彼氏、彼氏といつも以上に張り切つてその単語を連呼する。

みんなの楽しい楽しい夏の思い出が僕の周りをぐるぐるまわっていた。

半分閉じた生氣のない目で右斜め前の彼女を見つめる。健康的に焼けた肌に白いカッターシャツが絶妙にいやらしい。

そして、白いカッターシャツから透ける、水色のブラが更にいやらしい。

ああ。水色になりたい。

「なあ、夏休みどつかいったん？」

びっくりして目線を上げた。右斜め前の彼女が嬉しそうにこっちを見ている。

今まで一点を穴が空きそうなほど眺めていた僕は、とっさに言葉が

出なかった。

「いやあ…部活。」

ふーん、と右斜め前の彼女が言う前に僕は重ねてこう言った。

「あ、プールに行ったかな。市民プール。」

ニヤリとした表情で右斜め前の彼女は言った。

ふーん。

黒板に何かを書く音が聞こえる。知らぬ間に中林先生が教室に入ってきていて黒板に何やら書いていた。

教室が新学期のお祭り状態で全く気が付かなかった。と言っても、先生が来ていることに気付いてるのは最前列の数名と、委員長の真田さんくらいだ。

あと、全くクラスの会話に入れていない僕。

「おーい、もうそろそろいいかー。おーい。おい!!」

中林先生が黒板をドスンと叩くと教室は一気に静かになった。

黒板には大きく『二期』と書いてあった。

その横に小さく『おしらせ』

…おしらせ?

「はい、今日から二期や。いつまでも夏休みしといたらあかんぞー。先生も今日から仕事なんや。お前らもしっかり仕事せなあかんぞー。」

「はい先生。仕事ってなんですか?」

手を上げて指される前から既に立ち上がってるやつがいる。

「なんや惣太。自分がせなあかんこともわからんのかい。練習しすぎでボケたか？」

そー太は僕と同じ野球部で思ってる事、考えてる事がすぐ言葉になつてしまい、それゆえ何かとすぐ先生に質問したがる、いわゆるクラスに一人はいるよな的人材である。根は明るくていい奴なだけど。

「お前らの仕事はいっぱいあるぞー。まず勉強や。夏休み明けテストの勉強はもちろんしてきてるやろな？」

ぎゃー、うわー。

皆、ここぞとばかりに悲鳴をあげてみせる。

「あと文化祭の準備もお前らの大切な仕事や。」

あー。だるー。

最後列を陣取る不良集団、やたら髪の毛にワックスを塗っているサッカー部の連中がいつもより声高にだるー。を連発した。

「テスト。お前勉強した？」

そー太が僕を見ながら聞いてきた。僕はもちろんNOと答えた。

「おい、はい黙れ。お前らも大変なんはわかる。でもな、大人はもつと大変なんや。俺なんか休日に部活を見ならんし、お前らのテスト作ったり、職員会議で文化祭の…」

中林先生の愚痴が始まり、僕は窓の外を眺めることにした。
教室一番奥の一番後ろ。

三階からの眺めはそこそ良くて、大型スーパーのバルーンや僕の家付近の神社、僕らが小さい頃によく遊んだ公園が見える。

空は水色。あの娘の水色だ。白いてんてん雲が水色に溶けて街がキラキラ光ってるように見える。

サラサラと風が入ってきた。気持ちいい風。夏の風と秋の風がちよとど合わさったようなそんな。

グラウンドに二つの人影が見えたような気がした。

中林先生の声が教室に響く。いつもよりしつかり、そしてゆっくりとした声。

「あー、あとな、お前らにはあと一つ仕事があるんや。」

僕は視線を先生に戻した。

「今日の昼からクラスにもう一人、仲間が増えるんや。」

教室が今日一番静かになった。

「その…仲良く、したってな。」

先生は黒板をコンコンと叩いた。

大きく書かれた『二学期』の文字。

小さく書かれた『おしらせ』

さっきと同じ気持ちいい風が入ってきて、僕はグラウンドをぐるっと見回した。

いつもと同じ夏の終わりが、ギシリと音をたてたような気がした。

第2色目「よろしくおねがいします」

「あの、まだ難しいようでしたら後日改めて登校していただいても結構ですので…」

一時間目の授業が始まり、静まり返った校舎に中林先生の小さく低い声が響き渡っています。

朝の光に照らされて大きく伸びた影と小さな影。

中林先生に何度も頭を下げているお婆ちゃんが、俯きながら何かを話していました。

渡り廊下まで伸びた影がゆらりと揺れたかと思うと、小さい影はもうそこにはありません。

中林先生の影だけが深く深く頭を下げたままの形で動かなかったのです。

昼休みの開始を告げるチャイムというものを僕は最後まで聞いたことがない。

昼休み5分前になると教室がザワザワと鳴りはじめ、3分前になると既に教科書を片付け始めるやつが現れる。1分前にはもう立ち上がってるやつも現れ、この教室には少し早い昼休みが訪れる。

教室は一気に盛り上がりを取り戻し、食堂に限定パンや、1日数食限定定食を狙うやつらの『食堂ダッシュ』を見届けてから僕もえっちらおっちら食堂に向かうのが日常だ。

限定物よりボリューム勝負の丼物さえ確保できれば腹八分で五時間目に良い具合の睡魔を誘発することができる。

「おいおい、なぜ俺を置いていく？」

そー太がニヤニヤしながら僕のお尻をギュツと掴む。机にうつ伏せ

て完全睡眠状態のそー太をわざわざ起こしてしつかり目を覚まさせてやってから一緒に食堂へ向かうより、さっさと食堂で丼物を確保して野球部連中と合流したほうが賢いに決まっている。

「今日はカツ丼と味噌汁だなー。」

そー太君よ。

今日は。じゃない。

今日も。だ。

一体何日そのセットを続ければ天井へと移行するのだろうか。

混雑した食堂で席を探しているとタカさんが一人端っこの席を陣取って黙々と限定定食を頬張っていた。

「タカさーん、ちょっと僕らの席を作りたまえ。」

タカさんは野球部のキャプテン。面倒見がよく誰にでも優しい。そー太のイラッとくるファーストコンタクトにも顔色一つ変えず僕らの椅子を用意してくれた。

「お前のクラス、四時間目終わるのいつも早いのに何で来るのが遅いねん。」

タカさんがニコニコしている。

「いや、こいつが俺を起こしてくれないんですよ。」

たまに惣太を殴りたくなる。

「そっついえば、お前らのクラス転校生が来たんやって?」

もう他のクラスにも噂が広がっていた。

「んー、昼から来るらしいよー。」

「昼から？へえ。」

「んー、昼からー。」

「そいつ前の学校で野球部だったらしいやん？」

「あーそう。」

タカさんが言うには転校生は野球経験者だという。どこからそんな詳細情報が流れるのか。

「惣太、そいつと仲良くなって野球部に引き込め。」

「うん。」

「わかってんのか？」

「はいはい。」

そー太の空返事が妙に深刻そうであった。

早々に昼飯を食べおわり中庭でそー太とジュースを飲む。朝に感じた爽やかな風はどこへ行ったのか、外は真夏並みに暑かった。

「転校生男かよー。」

おそらくこいつは転校生が可憐な女の子だと思い込み、勝手な期待を膨らませていたがタカさんに辛い現実を告げられ落ち込んだんだろうな。と思っていたらまさにその通りだった。

「俺の転校生とのラブロマンスを返せよー。」

もう昼休み終了のチャイムが鳴り始めていたので僕はそー太を適当に慰めてやってから教室に引っ張っていった。

五時間目は中林先生の社会科であったが朝の時点で五時間目はホームルームになることが明らかになっていたので教室はガヤガヤと騒々しく、後ろに陣取る不良連中は既に寝る準備を始めていた。

席につくと右斜め前の女の子が彼氏との夏の思い出をまだ友達と共有しているようで僕はいよいよ今日最低のバイオリズムをむかえようとしていた。あと一カ月は女子たちによる夏の輝かしい思い出日記を聞かされるのだろう。

サッカー部のイケメン集団は、じゃんけんに勝ったら相手の肩を思いつきりパンチできるといふなんとも痛そうなおゲームを教壇前で披露しており、いかにも俺ら腕力あるんだぜ、と言いたげな表情で次々と肩にパンチを浴びせ、ついには文化系男子たちにも被害は拡大していった。

いつも遠くからこうやって傍観している自分がちらちら視界に入ってきてまるで他人事のように嫌な気持ちになった。僕もこの騒ぎに加わってしまえば同じ色になって溶けてしまえるのに。

委員長が静かにしなさいよ！と一喝すると同時に中林先生が教室に入ってきた。白い画用紙に絵の具をぶちまけたような教室が一気に真っ白になった。

「今日の朝言ってたように転校生を紹介するからな。」

静まり返った教室が僅かに騒つきだした。

「じゃ、入って。」

小さい歩幅でゆっくり教壇に向かってくるのは。

女の子だった。

中林先生が黒板に彼女の名前を書くとき自己紹介をするように、と彼女に言った。

「はい！水嶋といいます！」

転校生は男の子。

どこから流れたのかわからない噂を信じ込んでいた僕達は一瞬この出来事を理解できず、時間が5秒ほど止まってしまったような感覚に襲われた。

彼女のえらく短い自己紹介と、えらく大きな声で僕はやっと、あの噂はデマだったのか、と理解することができた。

「あの、できれば名前も教えてあげてくれへんか。」

苦笑いの中林先生の言葉に教室は小さなクスクス笑いに包まれる。

彼女は更に俯いて体を小さくしながら、えへへと笑った。

…と思う。

長い前髪が目隠して表情がわからなかったからだ。

「水嶋里乃です。これからよろしくお願いします。」

第3色目「6の10倍」

五時間目のホームルームが終了するころには、僕の横の席に人集りが出来上がっていた。

「りのちゃんっていうんだ！珍しい名前よね？」

「水嶋はどこから来たん？」

「転校生は男って噂やってんで！びっくりしたわあ。」

思い思いの言葉をそんなフルテンションで投げつけられたら誰だって答えるのは無理だろうに。

僕は席を立って窓の側に避難することにした。

教室一番奥、一人余り席の僕を中林先生が指差して、一つ席を作るように、と指示された。

水嶋さんの自己紹介が続く中、僕だけが廊下に出されていた机と椅子を教室に持って入り、新しい席を作った。自由度が極めて高く、皆から羨ましがられた特等席に一つ机が入っただけで、妙に変な気分だった。

サッカー部連中が会って一時間も経たない女の子に、もう親しもうに話している。よく見たらその中にそー太が嬉しそうに加わっていた。

次々浴びせられる質問のマシンガン攻撃に、水嶋さんは丁寧の一つ一つ答えていた。

六時間目開始のチャイムが鳴って、やっと座るスペースができた僕は静かに席についた。

水嶋さんが申し訳なさそうに言う。

「あの。ごめんなさい。」

僕は大丈夫と返事して、まだ教科書が全部揃っていない水嶋さんに机をくつつけて英語の教科書と今までのノートを見せてあげた。水嶋さんは自分のことを『りの』と呼んでって言ってくれたが、何か無性に恥ずかしく、水嶋って呼ぶよと愛想無く言う僕に笑顔で返事してくれた。

最初教室に入ってきた時は地味で暗そうな印象だな、と思っていたけど明るくて素直な良い子ってのが今の印象だ。なんだかホッとした。

ふと、突き刺さる視線を感じて教室を見渡したら、そー太が梅雨よりもじめじめした目でこっちを見ている。

もう奴は水嶋の事を自分の所有物か何かだと思っているらしい。放課後にも質問ラッシュがくることを粗方予測していた僕は水嶋に、そんなに一つ一つ答えなくていいんだよ。と言ったのだが、彼女は「話し掛けてくれるの、すごく嬉しいですから。」と笑顔で答えた。

案の定、放課後の僕の席は水嶋里乃質問コーナーへと成り果て、僕は巻き込まれる前にそー太を引っ張って部活に向かった。

中林先生の「仲良くしてやってな。」という言葉と、水嶋が自己紹介最後に小さな声で言った「仲良くしてください。」の言葉を思い出し、すごく楽しそうに質問に答える水嶋の姿を見て僕はなんだかすごく嬉しくなった。

しかし数日後、事件は起きた。起きてしまったのだ。

夏休み明けテストが返却され、僕は限りなく0に近い点数を獲得した。もちろん野球部顧問の中林先生はホームルームで激怒し、一週間後の再テストで60点以上とらないとレギュラーからの降格と、土日の練習日には一人教室で問題集を延々解いていく補習を言い渡

された。力なく席に戻った僕は、水嶋になんとかどうやって勉強しているのか聞いてみた。

「大丈夫ですよ。パターンさえ覚えちゃえば。」

パターンがわからないから僕は頭を抱えているのだ。

ふと水嶋の答案が見えた。

10点？

なんだ、こいつも馬鹿なんじゃ…

よく見たら0が一つ多かった。水嶋はこの学校に入ってきて早速満点を叩きだしていたのだ。僕が100点を出した記憶といたら小学生の生活の時間。カエルについて熱い気持ちを述べた作文で100点をもったことがある。

ちなみに90点以下の子は一人もいなかったわけだが。

僕は世界が終わったかのように水嶋に愚痴った。それはもう愚痴ってやった。

水嶋はいつも通り、一つ一つ言葉を噛み締めながら、うんうん、と頷いてる。

お前の言うそのパターンさえわかればな。

僕は渋々部活の用意をして席を立った。

水嶋が「あつ」と言っ僕を呼び止めた。

「一週間後に60点…ですよね？」

その通り。いまの点数を一週間後に約10倍に持っていかなくちゃならない。

「もしよければ、その…。」

手を前に組んで俯いている。こいつが滅多に自分から発信しない性格なのはなんとなくだがわかっている。何か主張したい時にこういう格好をするのが水嶋の癖なのだろう。

「わからないところはどこですか？」

「全部。」

水嶋はえへへ、と笑った。

長い前髪が目隠してよく表情を確認できなかったけど。たぶん笑ったんだと思う。

どんな手段でもいい。

僕は一週間後に60点を取らなければならない。

頼むぞ、水嶋里乃！

第4色目「Enjoy Life」

放課後。

グラウンドを見下ろしていると、そー太が気だるそうによちよちランニングをしている。そー太の後ろにブランカが意地悪そうな顔して付いていく。

ブランカはそー太と同じく野球部の友達で、クラスは違うけど小学校からの付き合いだ。

ある格闘ゲームにブランカというキャラクターがいてこいつを使うブランカは鬼のような強さを誇る。

他のキャラクターを選ばせたら全然弱いんだけど、何故かブランカを使った時だけは鉄壁の防御と目にも止まらぬ攻撃を繰り出すのだ。その異常な強さは地域を駆け巡り、いつの間にかこいつはブランカと呼ばれるようになっていた。

僕もそー太もブランカもタカさんも、小学校の草野球少年団に所属していて、それはもう毎日バカなことばかりしていた。

練習なんてまともにした日はない。

集まる場所があつたからそこに集まったまでだ。

要するに僕らは暇だったのだ。

お、ブランカが気だるそうなそー太にシャドウピッチング用のタオルでピシピシやり始めたみたいだ。

恐らくあのタオルはあらかじめ濡らしてあつて攻撃力を上げているはず。あれは痛い。

中林先生がいないと練習はただのお遊び状態だ。

そんな中、タカさんは真面目にバッティング練習をしている。

練習試合、そろそろだもんなあ。

「あの、きいてますか？」

視線を戻すと水嶋が困った顔で僕を見ていた。
聞いてなかったと言うと水嶋はもう一度問題を初めから読み始め、
ゆっくり文章を拾いながら解説してくれた。

「こういう形の問題はこう考えれば解けるんです。ほら、この応用問題も。」

僕は一週間後の再テストに向け、放課後の少しの時間を利用して水嶋に勉強を教えてもらっていた。

少しも理解しない、いや、理解しようとしないう僕に水嶋は何度も何度も丁寧に教えてくれた。

それを毎日だ。

優しい水嶋に甘えていたんだと思う。

顔色ひとつ変えずに協力してくれるこいつに。

転校生だからまだ大きな顔は出来ない、ある程度は言うことを聞いてくれる、といった最低な考えもあったのかもしれない。

勉強を教えてもらえるから、じゃなくて、支えてくれるから。ここに僕の意地らしい気持ちが入り込んでいた。

時計が17時を回り、少し空が紫色に染まり始めた。

僕は水嶋に、そろそろ部活に出る旨を伝え、準備をして席を立った。
また明日も…と言いかけたとき水嶋は「はい。もちろん。」と笑顔でこたえてくれた。

「60点、絶対取ってね。」

水嶋はグラウンドとは反対にある校門側の下駄箱に続く階段へと姿を消した。

僕はグローブを取り出して急いでグラウンドへ向かった。

タカさんが言う。

「ノックするで！はよポジションについてや！」

あの忌々しい夏休み明けテストの返却から一週間が過ぎ、西日が差し込む教室で僕は再テストを受験していた。

計算が少々厄介であつたが、水嶋が最終手段と言つて教えてくれた「こう書いてあればこの公式。こう問われたらこの公式。」と犬にもわかる覚え方のおかげで何とか空白を埋めることができた。

返却された再テストは大きく62点と朱入れされており、中林先生にやればできるんです、と言つてやったが、あっさり「やれて当たり前。」とカウンターをもらった。

水嶋にも報告した。

「よかつたですね。」

につこり笑つてグラウンドとは反対側の階段に消えていった。

どうにかレギュラーの座を守り切り、練習試合に向けてそろそろ真面目に練習に取り組もうと思つた。

グラウンド前の掲示板には文化祭の貼り紙がもう貼りだされている。

「Enjoy Life」

月並みなテーマだ。

昼休みにいつもの井物で胃袋を満たし、ポケットに密かに忍ばせておいたフルーツグミを食べながら自販機でジュースを買つた。

「お前、ほんとジンジャーエール好きやなあ。」

声をかけてきたのは岡野だ。僕の家のおすぐ近所に住んでいる。同じ

町内つてこともあり、小さい頃は地藏盆や地域の餅つき大会などでよく一緒に遊んでいた。

小学校の時は一度も同じクラスになることはなく、話す機会も少なかったが、中学一年時は同じクラスになり、また昔のようにボチボチと遊ぶ関係に戻っていた。

「俺もジュース飲も。」

岡野はカルピスを押すと同時にオレシスカッシュのボタンを連打し、原液をミックスさせて見事オレシカルピスソーダを作り上げた。

「転校生はどうよ？」

どうよって言われても。

普通にやっておられますよ、ええ。

岡野は「そりゃよかったよかった。」と呟いて次は体育だからと早々中庭から去っていった。

教室に戻ると水嶋が一人席に座っていた。

小さなお弁当箱を緑のハンカチで包んでいる。

「あ。」

カランと落ちたのは小さな丸いフォークだった。

へえ、懐かしい。小学校の給食の時に使っていたスプーンフォークだ。よくこれでカチカチのピーナツバターをペンペン叩いて柔らかくしたもんだ。水嶋のスプーンフォークは小学校の時に支給されたシンプルな銀色のタイプではなく、プラスチックになっていて女の

子らしい薄いさくら色をしており『くんくん探偵』というキャラクターが犯人はキミだワン！とこちらを指さしている柄だった。

「あの、すみません。ありがとうございます。」

水嶋はスプーンフォークをお弁当箱と一緒に包み込むと、いそいそとどこかへ行ってしまった。

文化祭がいよいよ近づいてきており、2年生は各クラスで大きな一枚絵を作る事になった。

うちのクラスはただ絵だけじゃおもしろくない、ということで折り紙を使った巨大貼り絵を作成することになった。

「えー、巨大貼り絵ですが。何を作りますか？」

委員長が前に出て意見を求める。

中林先生はピカソのゲルニカなんかどうだろう、とアイディアを出していたがいまいちゲルニカを理解していなかった生徒からは良い反応はもらえなかった。

「あのドラマのロゴにしようやー！」

「富士山とかでいいんじゃない？」

「もう先生の似顔絵とかでええやん。」

「はい、面倒くさいからやめませんかー？」

そー太がまた調子に乗って委員長に指される前から立ち上がっている。

「やめません。はい次。」

委員長がそー太を一刀両断した。教室が爆笑の渦に巻き込まれる。なんだか、決まりそうにないなあ。

僕はうわの空で椅子をキコキコやっていると水嶋が俯いて手を前に組んでもじもじしているのが見えた。

お前、なんか良い案ある？

水嶋は「あの。」を五回くらい繰り返してた。口癖なのだろう。

「くんくん探偵…とか？」

なるほど。あのスプーンフォークといい、こいつはくんくん探偵が好きなんだな。

「それ言えば？」と、僕が言うと水嶋は首を横にぶんぶん振った。

「あの。ただの思い付きだから。くんくん探偵は子供向けの人形劇だし。みんな嫌がると思うから。」

だそうだ。

「何か意見はありませんか？」

委員長がいい加減腹立ってきているのがひしひしと伝わる。

中林先生も委員長の苛々に気付いているらしく、早く意見を出さないか、と教卓をコツコツ蹴っていた。

「あーもう。なんでもいいーよー。お前なんかないのー？」

そー太がこっちを見ている。先生も。委員長も。みんなも。

「くんくん探偵。」

頭にくんくん探偵がぐるぐる回っていて、つい口走ってしまった。

「くんくんつて、あのくんくん?」

そー太がニヤニヤしている。

「アハハ!可愛いやん!くんくん探偵!」

右斜め前の彼女が腹を抱えて下品に笑っている。

「かわいいやん!」

「おー懐かし!俺むかし見てたぞ。」

「簡単そうだし、よくない?」

「くんくんにしょーぜ」

教室が一気にうるさくなった。皆口々に思い思いの言葉を口に出すから誰が何を喋っているのかもはやわからない。

「静かに!決定でいいですか!?」

委員長が明らかに苛々していた。

無理もない。とつくに掃除の時間をむかえているのにホームルームがダラダラと延長してなかなか終わる気配がなかったからだ。

ああ…くんくん…。

僕は頭を抱えながら静かに席についた。

「くんくん探偵になっちゃった。」

水嶋はすごく嬉しそうだ。

時折見せる笑顔よりも、一段と大きな笑顔だった。

委員長が黒板に大きく書いた。

『ピカソのゲルニカ』と書いてある横に大きく花マルをつけて。
くんくん探偵。

第5色目「イメージ」

文化祭での制作物が堂々決定し、大きな板に大きな画用紙が貼り付けられ、なんとも愛らしい『くんくん探偵』がこつちを指差して犯人はキミだワン！と決めゼリフを言っている。まだくんくん探偵は折り紙を貼りつけていない下書きの段階であって、これからこの巨大くんくに命を吹き込んでいくのかと思うと軽い目眩さえ覚えるのであった。

主に放課後やホームルームの時間を利用して、少しずつ下書きの絵を完成させていき、僕も昔に使っていたくんくん探偵のぬりえを押し入れから発掘し、資料として作画に加わったりもした。絵心という難解なものを今一つ理解していなかった僕は美術部の女の子に何度もダメだしされ、ついには真っ白なくんくに赤、青、黒といった配色支持を書き込むだけの役まで降格していた。

皆それなりにではあったが文化祭へのモチベーションが高まりつつあり、本当にそれなりに準備というものを楽しんでいたのだと思う。

ある日の放課後、スパイクを教室に忘れていた僕は練習を抜け出し、急いで階段を駆け上がった。

教室に入ると水嶋が一人、ほうきを持って掃除をしていた。

「あれ、お前だけか。」

スパイクを取って水嶋に声をかけた。

毎日放課後には巨大貼り絵を作成する当番が決められていて今日は水嶋を入れて六人の当番が貼り絵を作成しているはずだった。

他のやつらはどこにいったんだろう。

水嶋が掃除をしながら言う。

「みなさん部活があるみたいで。私は部活入ってないから後は私がやるって言ったんです。あの、それに、私くんくん書くの得意だから。」

そっか、と言って壁に立て掛けてある巨大貼り絵を見た。

そこには見事なまでに犯人はキミだワン！と会心の台詞を決めるカッコいいくんくん探偵が描かれていた。水嶋が大まかな全体像や細かい修正を入れたのだらう。まるで今にも動きだしそうなくくん探偵の下絵が完成していたのだ。

「うん。くんくん探偵よりくんくん探偵だ。お前すごいよ。」

水嶋はえへへ、と笑った。

その後、ホームルームの時間を利用して、いよいよ巨大貼り絵に色をつける日がやってきた。いつものように教室はお祭り騒ぎのような状態で真面目に作業に取り掛からないやつがほとんどだった。今あるだけの折り紙や糊だけじゃとても分量が足りず、委員長と中林先生を含めた有志達が買い出しに繰り出していたからだ。

教室の真ん中に画用紙を広げ、大きめにちぎられた折り紙をペタペタと貼っていく。そー太がちぎる折り紙は異様に大きく、横にいる僕がそれを更にちぎり直して貼っていった。

5分もたたないうちにそー太は集団から外れ、不良軍団に交じってどこかへ行ってしまった。

正直そー太はいてもいなくてもいい状態だったので引き止める理由はない。

しばらく作業を進め、僕はトイレに立った。

廊下に水嶋が一人黙々と折り紙をちぎっている。大きな缶に山盛りになっていくちぎられた折り紙。

赤の缶、青の缶。

僕らのダラダラした作業が追いついていたのはこいつが裏で大量のちぎった折り紙を用意してしてくれたからだった。

「水嶋。もう大丈夫じゃないかな。中に入って一緒にやろう。」

他のクラスに比べたらかなりの遅れ具合であつたが、なんとかくん探偵の顔の部分に色を付けることができ、あとは体の部分に色をつけて仕上げといったところだ。

委員長と水嶋、美術部の川村が折り紙をどんちぎっていつて、僕らがくんくん色をつけていく。

文化祭一週間前を迎え、いよいよくんくん探偵が完全に近い形で姿を表していた。

昼休み、食堂ダッシュを見送つて、いつものようにタカさんとそー太と隅つこの席で井物をかき込んでいた。

「おまえらのクラス、なかなかええやん。くんくん探偵懐かしいな。」

タカさんがニコニコしながら言う。

「だろ？もつめっちゃすげーだろ！」

ほとんど何もしてないそー太が言うとなりに腹が立つ。

「うん、すごいわ。うちなんか全然おもないよ。どっかの画家の絵らしいけど。くんくんとかの方がいいよ。思い入れがある。でも綺麗に書けてるなあ。あれお前が書いたんだろ？」

タカさんが箸をくるくる回しながら語る。

僕はあくまでアイデアを出しただけで、くんくんを忠実に書いた

のは水嶋だと伝えた。

「水嶋？ああ、転校生！へえー、絵上手な子なんやな。すごいなあ。」

タカさんとはにかく何でも褒める。実際、水嶋のくんくんは傑作だが。

食後、いつものようにそー太と中庭でジュースを飲む。

「水嶋さあ、頑張ってるよな。」

そー太がベンチに寝転がりながら呟く。

「なーんかさ、水嶋ってとっつきにくいんだよなあ。自分からは絶対喋らないし。」

その節はある。決して自分から発信しようとはしない。常に受け身で待っている感じだ。話し掛ければ話してくれるが。

やはり僕が感付いていたように、そー太も気付いていたのだろうか。

「お前、仲いいよな。何話してんの？水嶋の考えてることよくわかんなくってさあー。話し掛けてやりたいんだけどね。」

そー太の優しさだった。

やはり水嶋はクラスに溶け込めていないようであった。あいつがよく一人で見るところを見かけている。その時に見せる寂しそうな顔をそー太も見ることがあるのだろう。

しかし周りの見解からすれば水嶋はとっつきにくい、というイメージを持たれていて、そー太は誰かしらにその話をされて、そー太自身も持っていた苦手意識が徐々に表に出てきてしまっていたのだろう。

う。

そー太はヘラヘラして頼りなさそうにみえて、一番周りの事をよく見ていた。そー太の優しいところが、そつと僕への伝言のように感じた。

「くんくん、もうすぐだな！ちゃんと完成させような。俺もそろそろ真面目に手伝うわ。お前じゃなくて水嶋だろ？くんくん探偵のアイディア出したの。」

そー太は大きく背伸びをして、呼び出しがあるから、と職員室に向かった。

僕はいつもより早めに教室に戻ると水嶋が頬杖をついて窓の外を眺めていた。吹き込む秋の風が線の細い水嶋の髪をサラサラ撫でていく。

水嶋の机には薬を入れるケースが転がっていてカプセルと大小形の違う錠剤が入っていた。

「結構遠くまで見えるだろ？」

僕は席に戻って窓の外を眺めた。

「あの大型スーパー、いつもバルーン出しててそれがゆらゆら揺れるのをいつも授業中に見てんだよ。いつまで閉店セールやるつもりなんだろね。もう半年だぞ。」

水嶋がクスクス笑う。

「お前、風邪でもひいたか？薬飲んでるみたいだけど。大丈夫か？」

水嶋は少し慌てたように薬をカバンの中にしまい込み、大丈夫です、

と笑う。

窓の外を眺めていた水嶋。やっぱり寂しそうな顔をしていた。

第6色目「その笑顔」

「えー、いよいよ明日から文化祭や。二日間あるから各自、自由に校内を回ってくれ。ちなみに二日目は先生達の合唱があるから見に来てや。以上。」

中林先生がそそくさと教室を後にした。ここ最近、先生は教職員達による出し物『合唱』の練習に駆り出されているようで、帰る前のホームルームがいつになく淡泊だった。野球に全てを捧げてきた人だ。歌なんて文化的なものは先生の守備範囲外なのだろう。

今からもう既に緊張している様子が伺える。

僕はというと今日から三日間、部活は休みになり授業もない。今日は文化祭の準備ということで朝からテント張りを手伝わされたり、今年のテーマである『Enjoy Life』と書かれた看板を校門前に飾り付けたりと力仕事ばかりやらされていた。

中林先生の指示による強制労働を強いられていたのだ。すっかりお祭りムード一色になった校門をくぐり、振り返って校舎を見上げる。こう眺めていると意識しなくても自然とワクワクしてくるのは何故だろう。

そー太とブランカは久々の休みに歓喜し、大量の小銭を握り締めてゲームセンターに消えていった。

今日は死ぬまで遊ぶ、と言っていたが、彼らなら死んでも遊んでそうだ。

タカさん達はファーストフード店でおやつを食べてからまた学校に戻って準備をやらされるそうだ。

誰も捕まえることができなかった僕は仕方なく帰ることにした。

「お、今帰るか？」

岡野がギターを抱えて校舎から出てきた。
ギターなんて持って、今から駅前に出て小遣い稼ぎでもするのだろうか。

「いやいや、俺軽音楽部だし。二日目の出し物の時間にバンドやるってこの前言ったやんか。体育館でやるからな、来いよ。」

二日目は中庭で吹奏楽部の演奏会、体育館は3年による演劇と個人による出し物のステージになっている。ダンスやバンドなど、学生生活を青春色に染めてしまったための魔法の空間を提供されるのだ。バンド演奏なんかした日には、どこかしの女の子からお声がかかり、そのままくっついてしまうというのが毎年の事らしい。
岡野もまた、その輝かしい毎年にあやかろうとする一人であった。ちくしょう羨ましい。

「一緒にかえろーぜ。」

岡野と一緒に歩きだした。

「そつえば、お前んとこの絵すごいな！くんくん探偵！」

岡野が笑っている。

「いやー、でも懐かしいよ。上手にできてるもんなあ。」

「あれは僕達の努力と才能だ。」

僕は頷きながら言った。

「何言っただよ。お前ら、なんもやってないだろうが。なんもや

ってないからあそこまで完成度が高いんだ。」

岡野がケラケラ笑いながら背中をバンバン叩く。

「アホか。俺も渾身の芸術性を振り絞って色づけをしたんだぞ。」

「うそつけ。水嶋さんがずっと一人でやってたぞ。」

「え？」

なんだって？

「だから！放課後、ずっと水嶋さんがやってたって。俺バンドの練習で何度かお前のクラスの前を通ったんだけど、いつもやってたぞ？委員長とか美術部の川村とかさ、あと何人かと一緒にやってたみたいだけど。みんな部活の日は一人でやってたなあ。」

他のクラスから大幅に完成が遅れていたうちのクラスだったが、わずか三日ほどの間に驚異的なスピードで仕上がっていったのを覚えている。時間が比較的自由に使える文化系クラブのやつらを委員長と中林先生が集めて完成まで持つていったとばかり思っていた。放課後になれば委員長がスケジュール表を持って川村や水嶋に相談しているのを見ていていつも、すまん、と思いながら部活に向かっていたからだ。

（水嶋、頑張ってるよなー。）

そー太が言ってた事を思い出した。

「なんで気付かなかったんだろ。」

「え？なに？」

岡野が聞き返す。

「なんでもない。」

少し早足で家路を急いだ。

目の前にあるものを、ただ何となくこなしていた。

勝手にそれは現れて、消えていくものだと思っていた。何も面白くない、自分でラインを引いてすぐに背中を向けた。

自分が少し高いところから周りを見ている感覚。

でも。目の前にあるものに対して、一生懸命頑張っている人がいるのにどうして？

それは誰かの為？

自分の為？

（楽しい文化祭にしたいですね。）

水嶋が僕に言っただ事を思い出す。

なんだか、胸の辺りが熱くなって、ヒリヒリと痛かった。

文化祭当日。

校門をくぐると他のクラスの生徒や他学年の生徒が演劇の衣裳、出し物の小道具などを持って走り回っていた。本番前の慌ただしい雰囲気を感じて、今日はお祭りなんだな、と再確認した。

一旦、教室に集まってからは各自好きなように見て回る事ができ、夕方の下校時間まで自由に過ごすことができる。一日目は屋台やクラブの出し物、展示物がメインでこれと言って盛り上がりには欠ける

部分があり、まあ放送部が視聴覚室で行う映画上映くらいが一番無難なところだろう。

もちろん先生達の監視も緩いので、こっそり抜け出して姿をくらます輩も出てくる。

僕も抜け出して帰りたいが。

「おーい、どこいくー？」

そー太がパンフレットを持って近づいてきた。

「タカさんとかブランカ達と焼きそばでも食いにいくかなー？」

「すまん、そー太。お前らだけで行っけてくれ。」

「え！？なんで？」

そー太が目を丸々にして驚いている。

「いいから。ほら、行け。」

首をかしげているそー太を見送り、教室に戻った。さっき登校してきたばかりの、その人の席へ真っすぐ向かい、僕は声をかけた。

「水嶋、よかつたら一緒に行かないか？」

席についたばかりの水嶋がキョトンとしてこっちを見ていた。

「あ、もう先客がいるなら…いいんだけど。もしよかつたら…と思っ
て。」

委員長が水嶋に声をかけようとしていたのに気付いて、思い切った事を言ってしまったと少し後悔したんだ。
でも言えてよかったと思う。

水嶋のあの笑顔。

こいつがこうやって笑うのを見るのはなんだか随分久しぶりのように感じる。

「はい！」

グラウンドの方から、もう賑やかな声が聞こえている。

委員長は少し微笑んで教室を静かに出ていった。

楽しい文化祭になればいい。

素直にそう思った。

第7色目「僕達は映画仲間」

地下に建設された極秘研究施設『クヌート・洛北』

表向きはパツとしない化粧品会社で、そんなに効果があるとは思えない化粧水やダイエット食品を取り扱っている。

しかし研究員兼社長である『コズミック山田』はついに、永遠の若さと美貌を手に入れることのできる不老不死の薬を開発することに成功した。

服用した途端、肌は水をも弾き、加齢による目元の小じわはまるで10代のピチピチ女子高生のように張りのあるものに！

体力は充実し、肝臓は綺麗なピンク色を取り戻したのだ！

更年期障害に悩んでいたコズミック山田の下腹部がチクチク痛みだす！

「やだ！わたし、閉経したはずよ！」

永遠の若さと美貌を手に入れたコズミック山田は本社に営業にきていた新入社員『鈴木君』と禁断の恋におちてしまう！

「鈴木君…わたし…」

「ああ、わかつているよ…山田、いや…コズミック！」

しかしその幸せは長くは続かなかった！不老不死薬の副作用によってコズミック山田の体は急激に老化を辿り、ついには肌年齢105歳にまで落ちてしまった！

「不老不死薬の一番の効能は死なないこと…でもわたしの体はどんどん枯れてゆく…」

果たしてコズミック山田はどうなってしまうのか！

新入社員鈴木との恋の行方は！

全米が涙した壮大かつ究極ラブストーリー！

「なあ水嶋。いまこんなのが流行ってるのか？」

「昔に公開された映画が今密かなブームになってるみたいですね。これも結構な人気作だったみたいで。特にラストの新人社員鈴木が地下施設ごと爆破するシーンはすごい迫力で。私も泣いちゃいました。」

「あれなんで鈴木は地下施設を爆破したんだ？」

放送部が企画した映画上映会に僕たちは来ていた。

水嶋は映画を見るのが好きらしく、文化祭のパンフレットを広げモタモタしている僕の腕を引っ張って真っすぐ視聴覚室に向かった。

やっぱりスクリーンで見たほうが楽しいです。

と水嶋は言っていたが。

どうもああいう薄暗い空間は僕に寝ろ、と言っているようにしか思えず、結局謎の爆破シーンだけ見て視聴覚室を後にした。

「夕方からまた違う映画も上映されるみたいですね。もう一回来ます？」

「そうだな。時間があればそうしよう。とりあえず昼飯にしようか。」

グラウンドや食堂に続く渡り廊下には様々なクラブが運営する出店が並んでいる。何故僕がこんな時間にふらしているのかというと、我が野球部はユニフォーム展示と写真を置いただけのいわゆる手抜き出し物を毎年やっているからであって、テニス部がせっせとクレープ焼いたり剣道部がみたらし団子をノルマ分必死に売り捌いてる横で僕らは嫌味な顔をしてたこ焼きを頬張ることができる。

手抜き出し物の教室には一年を配置しておけばいいし、なんとも気楽な二日間である。

グラウンドに出て出店を一通り見回りながら僕たちは昼に何を食べようか吟味していた。たこ焼きでも食うかな、と思っていると、水嶋が視聴覚室に文化祭のパンフレットを忘れたからと言って足早に視聴覚室に舞い戻っていった。

グラウンド横の階段で水嶋を待っていると、背中をドーンと叩かれ声をかけられた。

「見てたぞ。デートですか、そうですか、なるほどねえ。」

ブランカがニヤニヤしながら立っていた。

「なんか変だと思ってたんだよ。そー太が半泣きで、あいつ来ないー、って騒いでたから。」

ブランカのことだ。5分後には野球部連中に良からぬ噂を流されるに違いない。実際水嶋と二人で回っているんだし、人が多いグラウンドにも出ているので事実の噂が流れても、僕たちは映画仲間です、と言っけておけば大したことにはならないだろう。

しかし、こいつは無い事をいかにもあったように話すタイプの人間であって、二人は付き合っていて体育館裏に消えていった、などという事を平気で野球部連中に報告するに違いない。

いや、絶対する。

早めに鎮火しておかないと。

「僕たちは映画仲間だ。」

「へえ。」

「水嶋のオススメ映画を見てきた。」

「へえ。」

「とりあえずブランカよ。たい焼きでも食べなさい。奢るから。」

「お前たちは趣味の合う映画仲間だよな。今理解した。」

ブランカを餌で黙らせる事に成功した僕は痛い出費ついでに、もう二つたい焼きを買った。

「ごめんなさい」と息を切らして戻ってきた水嶋はたい焼きをがつくブランカを見て少し申し訳なさそうに後退りした。

「じゃ俺はいくわ。ごちそうさん。」

ブランカは校舎の中へと消えていった。

水嶋が俯きながら僕に言う。

「あの。いいんですか？野球部の方達と回らなくて。惣太さんと約束してたんじゃない。」

「いいよ。どうせ毎日部活で一緒なんだし。そー太は今ごろ学校を脱出してるよ。」

「そうなんですか。」

「たい焼き食べる？」

適当に昼飯を調達して中庭に移動した。

いつもここでそー太とくだらない話をしていること、入学してから井物しか食べてないこと、部活のこと。色んな事を水嶋に話した。水嶋は楽しそうにうん、うん、と頷くばかりだった。

「そういえば、水嶋の事あんまり聞いてなかったなあ。転校してきた時、みんな質問してたけど。なんか席も近くだったし、タイミングを逃したって言うか…。」

あの、転校初日の騒がれように少し僕自身距離を置いていた。輪に入って同じように盛り上がるのができなかった。

やはりここでも、少し高いところから周りを見ていたんだと思う。どうも苦手だった。その場だけの興味と薄っぺらい付き合いをしようとするのが。

でも今は、素直に水嶋の事を知りたいと思った。

「私、小さい頃は東京にいました。」

「東京か。じゃあこっちの方言は慣れないでしょ？」

「最初はびっくりしました。みんな勢い良く喋るし、中林先生も。」

「あのおっさんはね。練習中なんて、何しとんねんボケが！とか普通に言うからね。」

「すごいですね。」

水嶋があはは、と笑っている。

「部活は何かやってたの？」

「美術部でした。」

「水嶋、絵上手いもんな。こっちでも美術部に入ったらいいのに。」

「入ろうかな、とは思ってたんですけど…」

水嶋は俯いて黙り込んでしまった。やっぱり途中から入部するのは少々気が引ける部分もあるのだろうし、新しい環境で新しい事を始めるのはそれなりに勇気があるものだ。

ましてや水嶋のこの性格。気持ちはあるが、やはりどこか遠慮しているのだろう。

「もし入ろうと思ってるならいつでも言えよ。美術部の川村に言っ
といてやるから。」

「本当ですか？ありがとうございます！」

こいつはこいつなりに、この学校に馴染もうと頑張っている。

僕だって見知らぬ土地に転校することになれば怖いし不安だ。水嶋が嬉しそうに笑うのを僕は知っている。水嶋が寂しそうに一人でいたことも知っている。

だから僕は。

こんな風に考えたことなんて今まで一度もなかった。

これは水嶋に対するただの同情だったのだろうか。

転校生に手を差し伸べて、その善意に満足したいだけだったのだろうか。

どっちにしろ、水嶋と出会って、変わっていく自分がなんだか可笑しくって恥ずかしかった。

「まだ映画まで少し時間あるな。」

「15時からですね。」

「そうだ。くんくん探偵見に行こう！お前の考えた、くんくん探偵」

「あ、はい！」

グラウンドから聞こえる賑やかな声。

こんな日に見る僕らのくんくん探偵はきつと、いつも以上にかつこよくて、素晴らしいに決まっている。

第8色目「二人だけの文化祭」

文化祭二日目。

いつもよりかなり遅くに登校した僕は、やけに静かな廊下を寝不足の体を引きずって歩いていった。

昨夜から急に冷え込むようになり、ベッドには厚手の掛け布団と一緒に毛布が敷いてあった。

夏からずっと開けっ放しだった階段の窓を閉め、僕の部屋には小さな電気ストーブを置くことにした。

スイッチを入れると、ジーンという電子音の後にチリチリと赤く染まっていくストーブ。

僕はベッドに横になりながらしばらく天井を見つめ続けた。

目に焼き付いている今日の風景。

心に焼き付いている今日の出来事。

音のない部屋に、僕の脈打つリズムだけが聞こえる。

張り出されていた僕らの『くんくん探偵』は他のどのクラスよりも出来がよく感じた。

それは自分のクラスのものだし、自分が制作に関わった訳だし、愛着があるのは当然の事。

でも、もっと他に特別な思いがあったのかもしれない。今までになり、特別な何かが。

僕らの学年が作った巨大貼り絵は文化祭終了後もしばらくは張り出されるという。

僕は毛布に包まりながら、目を閉じた。

たぶん眠りに入ったのは深夜の3時を過ぎてからだと思う。

新聞配達がやってくる音を意識の遠いところで聞いた気がするから。

教室に入ると既に誰もいなかった。今日は体育館やあちこちに作られたステージでの出し物がメインだ。

（えーと、午前中は体育館で演劇か。）

午前中は3年生による演劇、午後からは各ステージでのバンド演奏や吹奏楽部のコンサートがあつて全生徒は今日一日それらを鑑賞して回る。

一日目と比べると歩き回らなくていい分、楽なスケジュールとなつていた。

体育館に入ると舞台上での前説が既に始まっていた。満員状態の客席を縫つて、僕のクラスの席を探す。場内は薄暗く、パンフレットに書いてある座席割があまり見えない。

1年生が後ろの方で、2年生は前だつてことはわかつてるんだけど。

「おーい、ここだここだ！」

そー太が僕を見つけて手を振っている。

「遅いよー。早く座れ。お前の席、後ろだぞ。中林が教室の座席順に座れつて言うんだよ。出席とるからつて。こりゃ抜け出せそうにないなー。」

舞台の小さな明かりが全て消えて、舞台に大きなスポットライトが当てられる。場内にアナウンスが響く。

「3年4組による演劇、まもなく開幕です。」

僕の横の席が空いている。

「あれ。今日は休みか？」

前に座っていた委員長が振り向いて僕に言った。

「水嶋さん、体調悪いみたいで。朝は来てたんだけど今は保健室で休んでもらってるのよ。」

「そうなんだ。」

「後でまた様子見てくるわ。午後から参加できればいいんだけど……。」

水嶋、大丈夫かな。

風邪をこじらせてるみたいだけど。

あつと言う間に3年生による演劇は終わり、午後からはそー太達と岡野が出演するバンド演奏を見に行った。女の子達が目を輝かせながらステージを見つめていて、轟音を生み出す岡野のギターは悔しいくらいにかっこよかった。

演奏終了後、案の定、岡野は女の子に囲まれ鼻の下を伸ばしていた。そー太とブランカは違うステージで行われているダンスイベントを見にいくといって途中で抜け出し、僕一人が会場の隅っこでうなだれながら嬉しそうな岡野を眺め続けた。

時計が16時を少し過ぎたところで、僕は席を立ち、会場を後にした。

巨大貼り絵の前を通って、中庭を通って、渡り廊下を歩く。

遠くで吹奏楽部の演奏が聞こえている。

いつの間にか、僕は保健室の前に立っていた。

中では養護教諭の日高先生がパソコンに向かいながらプリントを作成していた。

「あら、どうしたの?」

「いや、水嶋。大丈夫かなって。」

日高先生はニコリと笑って奥のカーテンを指差した。

「さて、私も体育館にいかなくちゃ。中林先生、今頃緊張してるだろうね。」

「はい。そうですね。恐らく。」

「水嶋さん、もう起きてると思うわ。声かけてあげて。じゃ。保健室出るとき鍵はかけなくていいからね。」

日高先生はそう言って出ていった。

風に吹かれてヒラヒラ揺れているカーテン。夕日が射し込んでオレンジ色の空間は、文化祭のことを忘れてしまふくらい静かな場所だった。

「水嶋、大丈夫か？」

カーテンを開けるとベッドに腰掛けた水嶋が窓の外をじっと眺めていた。

その視線は真つすぐ空を見上げている。

昨日見た、楽しそうな水嶋の影はどこにもなくて、すごく寂しそうな表情をしていた。

「肝心な時にね、こうなっちゃうんです。」

力ない声が僕を通り抜け、それからなんて声をかけてあげればいいのか、僕にはわからない。

「どうでしたか？今日は。」

「え…。うん。普通かな。」

何か気の利いた言葉をかけてあげるべきが、何故か空っぽの感情を吐き出すことしかできない。

水嶋を元気づける為にやってきたのに、逆に気を使わせてしまっている自分が情けなくて、恥ずかしかった。

「私も、見たかったなあ…。」

「もし、大丈夫そうならさ、合唱見に行かないか？今からでも間に合う。」

水嶋と目が合った。

長い前髪をサラサラと風が撫でていき、涙が流れていくのを僕は確かに見た。

グラウンドから聞こえるアナウンス。もうすぐ先生達による合唱が始まるという。重なるようにして、水嶋の声が僕の中に入ってきた。

「どうして、私と仲良くしてくれるんですか。」

「どうして…優しくしてくれるんですか。」

水嶋の手のうえに涙が落ちていく度に、僕の心臓が熱く熱くなっていくのを感じる。

水嶋は泣いていた。

射し込む夕日がさらに部屋をオレンジに染め上げ、僕達の表情を隠してくれたおかげで、僕と水嶋の視線はそれ以上合わさることはなかった。

握り締めた拳がどんどん堅くなって、汗ばんでいくのを感じていた。

「水嶋。今日はもう帰ろう。途中まで、帰ろうよ。」

こんなことしか言えない。そんな自分に腹が立つ。

ファイナーレを迎えている文化祭の声を背にして、僕達は黙ったまま、並んで歩いた。

時々、僕と水嶋の歩く早さが合わなくなる。

日が沈んで、だんだん空が紫色に染まっていく。

こういう時、僕はどうすればいいのだろうか。

もうすぐ僕の家が見えてくる。そういえば、水嶋の家はどこなんだろう。

ここから遠いのだろうか。

「あ、俺の家すぐそこなんだ。学校から結構近いでしょ？」

水嶋は黙ったまま俯いている。

「お前んちの近くまで送っていくよ。」

水嶋は大丈夫です、と言ったが、この先の公園まで送っていくことにした。

街灯が灯りはじめ、辺りはすっかり暗くなっていた。友達と別れて、急ぎ足で帰っていく小学生。

「ばいばーい。またねー。」

僕らが歩いてきた川沿いの道を走りながら遠くに消えていった。

水嶋がそつと口を開く。

「転校してきた時は、みんなに話し掛けてもらってすごく嬉しかった

たんです。」

「うん。」

「でも、私から話し掛けることがどうしてもできなくて。」

「…うん。」

「もっと…仲良くなりたいのに…。」

水嶋は立ち止まった。

気付けば、もう公園の入り口まで来ていた。

水嶋は俯きながらカバンをギュツと抱きしめ震えていた。街灯に照らされた涙が足元に落ちていく。

「寂しいよ…。」

初めてだった。

水嶋がこんなにも感情を表に出しているのも。

水嶋の本音を聞いたのも。

辛くて、苦しくて、寂しくて。

本当はずっと前から壊れそうになっていたんだろう。それでも、頑張つて、自分なりに周りに溶け込もうと努力してたんだ。

人一倍周りに気を使って、人一倍周りを感じて。

一人で背負いこんで。

誰だって一人は寂しい。

誰だって。

「俺は友達じゃないのか？」

「え…？」

驚いた表情で僕を見ている。

「俺の友達は何乃だ。だから、何乃は一人じゃないと思う。」

昨日はあんなに楽しそうに笑っていた。
すごく楽しかった。

だからもう、何乃の見える悲しそうな、寂しそうな顔は見たくなかった。

「俺の友達は何嶋何乃です。だから、何嶋何乃の友達に俺はなりたくない。」

「うん…うん！うん！」

「もう寂しくないから。寂しくなんてさせないから。絶対に。」

「うん…ありがとう。」

「でも俺はずっと何乃の事友達だと思ってたんだけどな。」

何乃はえへへ、と笑った。涙をいっぱい浮かべながら。

「そつだ、何乃。学校行こう！学校！」

「え、もう文化祭終わってると思うけど…。学校も閉まってるんじゃない…。」

「そんなの忍び込んじゃえばいいんだよ。まだ文化祭は終わってな

いよ！とりあえず里乃、懐中電灯持って来い。ありったけの懐中電灯。」

「懐中電灯？」

「くんくん探偵をライトアップしよう！俺も懐中電灯持ってくる。あと部室に発電機があったはず。それ使えば……。」

聞こえてますか？

水嶋里乃は友達ができました。とってもとっても大切な人です。これから2日目の文化祭が始まります。

二人だけの文化祭。

もうすぐ、集合の時間です。

楽しい文化祭になればいいな。

第9色目「スタートする背中」

「じゃ、いこつか。里乃ちゃん。」

美術部の川村が僕の横の席までやってきた。

その手には大きなカバンが握られていて、同じく里乃も川村とお揃いのカバンを持っていた。

部活に行く準備をしている僕は、里乃が首に巻く毛糸で編まれた暖かそうなマフラーを少し羨ましく思い、薄手のジャージ一枚を羽織って教室を飛び出した。

僕が川村に掛け合う前に、里乃は自ら美術部顧問のもとへ向かい、入部届けを提出。

川村も同じクラスに美術部員の仲間ができて嬉しかったのだろう。

よく二人で写生会などに出かけるようになっていた。

今日みたいな大きなカバンを抱えて。

校庭を走りながら思った。相変わらず里乃はおとなしく、クラスでは決して目立つほうじゃなかったけど、自分で居場所を見つけて自分の歩きたかった道を歩きだした。

こうなりたい、と願った日からの時間は、あいつにはもう関係なかったんだと思う。

スタートする背中を見送った時、そう思ったんだ。

「おいコラ！何トロトロ走つとんねん！」

中林先生の怒鳴り声が響く。

吐く息は白く、乾いた空気が指先の感覚を奪っていく。

里乃の大きなカバンには、今何が詰まっているのだろうか。もう今年も、残り少ない。

「パン買ってきたぞー。明日はお前が買いに行く番な。もう今から予約しとこ。カツサンドとー、あと甘い系を何個か。」

「わかってるよ。でも明日は弁当だ。」

一年時から食堂に通い詰めていた僕達は時々、購買部のパンを買って、こつやつて教室で食べている。

食堂で毎日食べていたら食費もばかにならない。

そう言つて母に弁当を作ってもらふようにしてもらつたのは一週間前の事。

白米に冷凍食品が詰め込まれただけの弁当。

母が仕事で朝の早い日は、今日みたいに購買部でパンを買っているのだけ。

里乃と机を突き合わせて、そー太が僕の横に座る。

やがて川村が小さい弁当箱を持って里乃の横に座つた。

「そういえば、野球部もうすぐ練習試合だっけ？」

川村がそー太の方を見て話し掛けた。

「なんだよ、それ言うなよ。大体なんでクリスマスに野球の試合なんてしなきゃなんないんだよー。」

「普通、冬はトレーニングばかりで春に向けて体作る時期なんだけど。中林先生が急遽隣の中学校に申し込んだみたい。」

そー太の肩をポンポンと叩いてフォローを入れておいた。

「大人の事情が見え隠れするぜ。」

パンを頬張りながらそう言ったそー太に苦笑いだ。

「試合見に行っていていい？もう冬休みやし。ね、里乃ちゃん。」

「あ、え…。はい。」

何が好きでこのクソ寒い中、弱小チームの練習試合なんか見にくるのだろう、と思ったが、そー太が嬉しそうにしていたのでそつと心のなかにしまっておくことにした。

冬の野球部の練習メニューはというと、ただひたすらに学校の外周を走ったり、いつもの倍の量の筋トレや素振りを行うだけでボールはほとんど握ることはない。練習試合前になるとさすがに各ポジションについてシートノックやバッティング練習を行っていくわけだが、やはり今の体作りの期間は相当キツイものがある。同じ事を延々繰り返し返す日々に、僕だけじゃなく周りもうんざりしているようで、明らかにモチベーションが下がっているのがまるわかりだった。いつものように学校の外周を走っていると、内股でヒョコヒョコ歩くと見覚えのある姿を見かけた。

「里乃ー！今帰りか？」

「あ、うん。まだ練習中？」

「今から筋トレがある。もう帰りたいわ。」

えへへ、と笑いながら里乃が言った。

「試合、楽しみにしてるからね。頑張つてね。」

もうすぐ練習試合。

せつかくだから頑張ろう。そう思った。
グラウンドに戻るとそー太とブランカがだるそうな顔をして寄って
きた。

「なんだよお前。嬉しそうに。気持ち悪いよ。」

「道で10円でも拾ったのか？」

別に。そう吐き捨てて勢い良く素振りを始めた。
そー太が湿った目で僕を見ながら言う。

「気持ち悪いよ。」

第10色目「Merry Christmas」

クリスマスというイベントに特別な思い入れがあるわけではない。しかし、どうしたものかこの日になるとテレビは一気に面白くなり、テレビ欄には夜遅くまで見たい番組が並ぶ。

母さんはこの日だけデリバリーでピザとチキンを注文するし、父さんは甘くてほんのり白葡萄の味がするシャンパンを買ってくるのだ。冷蔵庫を開けてみると大きな白い箱が入っており、微かに苺と生クリームの甘い匂いが僕の嗅覚を刺激する。いつもと違う食卓に、僕は自然と今日は何かよくわからないけど良い日なんだな、と認識する。

お腹がいっぱいになった後に入った炬燵は、優しく僕を包み込んで夢の世界へと導いてくれる。

微睡んでゆく意識。テレビの音が一瞬間こえなくなったと思ったら婆ちゃんの声がすぐ耳元で聞こえ、僕はあと一時間で終わろうとする何かよくわからないけど良い日に戻ってきていた。

「炬燵で寝たら風邪ひくぞ。はよお風呂入ってお布団に行きなはれ。」

その日は朝から快晴で雲一つなかった。朝八時、校門前に集合した僕らはバスに乗って隣町にある野球場を目指した。

「タカさん、昨日はどうだったんだよ？」

そー太が菓子パンを頬張りながら早速タカさんに絡んでいった。

「どつて？なにが？」

「なにがじゃないでしょーが。彼女と熱いイブの夜を過ごしたんでしょ。このムツツリキャプテン。」

タカさんは僕のクラスの永瀬さんと付き合っている。テニス部の永瀬さんは明るくて活発で、他の男子からの人気も高い。文化祭最終日に永瀬さんの方から告白したらしく、二人は付き合いはじめたようだった。

「クリスマスツリー見に行っただくらいやぞ。それからすぐ帰った。」

「ツリー？駅前の？」

「そう。めっちゃ大きくて綺麗やったな。なんかツリーにいっぱい鈴がついてて、それを取ってプレゼントしたらその人は幸せになれるらしいよ。…って雑誌に書いてあったんやけど。」

「あっそう。で？チューは？チューはしたのかい？僕達はそれを聞きたい。」

何故か僕もそー太の言う『僕達』に入っていた。しかし興味が無いと言えば嘘になる。恐る恐る顔を覗き込むと、タカさんは少しの照れ笑いの後に首を縦に振った。

僕がその時、サンタクロースに今日タカさんが全打席三振に終わりますように、とこっそりお願いしたことは秘密だ。

ふと、そー太を見ると、まるでこの世の全てが終わったかのような顔をして立ち尽くしていた。

気持ちはわかるが、知らぬが仏、ということもあるんだよ惣太君。野球場に到着した僕らは、まず対戦相手の学校と合同で練習をすることになっていた。中林先生が対戦相手の先生にペコペコ頭を下げているのをランニングしながら見ていた僕は、大人って難しい世界

で生きているんだな、と思った。
試合は昼過ぎ。
十三時プレイボール。

スターティングメンバーも発表され、僕は試合に備えて素振りを行う事にした。右足親指に重心を乗せて、軸がブレないように踏み込む。脇を絞めて、肘が上がらないように…。

「おい！」

一塁側の観客席から声が聞こえる。
保護者や野球好きのオヤジ達の中に川村と委員長、そして永瀬さんがいた。

「絶対勝ちなさいよ！」

「頑張れー！」

僕は素振りをやめて観客席に目をやった。
息が上がって、少しずつ僕の中の緊張感が姿を現わし始める。
里乃がこっちに向かって小さく手を振っているのが見えた。

「相手はエースやな。ええか？足を使つてまず一点。先制することを考える。守備は打たせて取れ。声出して行けよ！」

中林先生の言葉を思い出しながらバッターボックスに向かう。
四番のタカさんが三振して戻ってくる。がつくりと肩を落として。
ごめんよタカさん。僕がサントクロースに願ったばかりに。
立ち上がる僕にタカさんが言う。

「初球狙っていけ。」

打席に立った僕は不思議と落ち着いていた。
ツーアウト、一、三塁。

「俺を帰らせるー！」

三塁にいるそー太がリードを取りながら叫んでいる。初球ストレート。それだけを狙って…。

フルスイング。

相手校のエースから放たれた速球は、手応えの良い感触と共にセクターの頭上を越えていく。歓声の中、白球が高く高く、青空に向かって伸びていった。

あの時の感触は今もこの手に残っている。

「よし、これで気持ち良く年が越せるな。次会つのは正月明けやしばらくゆつくり休め。宿題はちゃんとやるんやぞ。以上、解散。」

中林先生はそう言って相手校の先生と一緒に車に乗り込んで帰っていった。

そー太が嬉しそうにしている。

「あー、終わったあ。冬休みだー！あ、さっき委員長がさ、夜からクリスマス会やるって言ってるさ。お前来るだろ？」

「いいな。行くよ。どこ集合？」

「七時に校門前な！とりあえず俺は今からブランカとゲーセン行っ

てくるぜー！」

そー太はブランカ達と肩を組みながら野球場を後にした。

6対0。試合に圧勝し、明日から冬休みが始まる。

誰もが嬉しさを隠しきれないでいた。

ある者はスキップしながらゲームセンターへ向かい、またある者は彼女と手をつないでどこかへ行ってしまった。

そして僕はいつものように出遅れる。

七時まであと三時間。

一度帰るとするか。

野球場を出るとそこには川村と委員長がいた。

「お疲れさま！勝てたやん！」

「すごいなあ。いきなりセンター越えやもん。」

「あれはほとんどまぐれだけだな。でもありがとつ。」

「惣太達は？」

「ああ、あいつらゲーセン行ってくて。」

「じゃあ、ちようどいいね！」

ちようどいい？

「バス亭に急いで！」

言われなくても今から帰るところなんだが。

「お前らはどうすんだよ？帰らないのか？」

「あたしたちはクリスマス会のお店予約してくるから。」

「それはこつちにまかせて！」

「あ、そういえば…水嶋は？」

「行けばわかるって！ほらほら、早くいけー！！」

川村と委員長に急かされた僕はバス亭へと向かった。冷たい風が吹きつけてくる。日も暮れかけていてかなりの寒さだ。制服に野球部のジャンパーを羽織っただけの格好では冬の夜に勝てるはずもなく、少々早足になる。川村と委員長のやつ、一体何を考えてるんだよ。とにかく、待たせているなら急がなくなちな。一番星が輝く紫色の空の下、僕は走りだした。

バス亭のベンチに里乃が一人、腰掛けている。いつものマフラーに毛糸の手袋。暖かそうな格好をしてくれていて、少し安心した。

「里乃。」

「あ、おつかれさま。」

「寒かっただろ？」

「ううん、大丈夫。」

「今日は勝ててよかったよ。ダサいところ見られずにすんだわ。」

「かつこよかったよ。すごく。」

とても恥ずかしかった。かつこよかった、なんて初めて言われたから。なんて返せばいいのか。そー太みたいに「だろ？俺かつこいい！」って言えばいいのに。この時だけはそう思える。

少しの沈黙。なんだか時間がゆっくり流れていつてるような気がする。

「バス、あと十五分か。本数、あまりないもんな。」

「あ、あのね…あの…。」

里乃が立ち上がって俯いている。手を前に組んでもじもじ。この仕草、なんだか久しぶりに見た気がする。長い前髪が顔を隠して表情がわからない。

よく考えれば、こうして里乃と二人で話をするのも文化祭以来だった。

「これ…あげる。」

里乃の手にはさくら色の紙袋がぶら下がっている。

「え、なに？」

「ケーキ。上手にできなかったんだけど…。まずいかもしれないけど…。」

僕にとって、ケーキなんて年に一度食べれるか食べれないかわからないものだ。昨日に引き続き、二日連続ケーキにありつけるなんて。

「嬉しいな。ありがとう。」

「袋、開けてみて。」

さくら色した紙袋の中には小さな箱と一緒にもう一つ、さくら色した紙包みが入っていた。

「あ、マフラーだ。」

里乃がいつも首に巻いている毛糸で編まれた暖かそうなマフラー。

「これ、お前が作ったの？」

「うん。」

「俺のは黒色なんだな。」

「…お揃いがよかった？」

里乃は紙包みからマフラーを取出し、首に巻いてくれた。里乃の頬がほんのり紙袋と同じ色に染まっている。冬の寒さとマフラーの暖かさが、僕の頬も同じ色に染めていった。

それは、家族以外からもらった初めてのクリスマスプレゼントだった。

「俺も何かお返ししないと。」

「いいよ。私が勝手にあげただけだから。」

「あ、ちょっと駅前まで付き合ってくれない？」

「え？」

駅前はここから歩いてすぐだ。僕はお菓子を作ることできないし、マフラーを編むこともできない。頭もよくないから勉強を教えてあげることもできない。だから、せめてこれだけでも。そう思った。

駅前には人ばかりができています。仕事から帰ってくるサラリーマン、買い物帰りの主婦。たむろする高校生。でも今日、一番多いのはカップルか。

「すごい…きれい…。」

駅前のクリスマスツリーは想像以上に大きく、とても幻想的で赤色にぼんやり光ったと思ったら水色にぼんやり光り、七色全ての色が光り終えたらキラキラと輝き始めて、まるで夜空の星を纏っているようだった。

見上げる里乃の瞳に、イルミネーションが映りこんでいる。

「ちょっと待ってて！」

僕はクリスマスツリーに駆け寄った。

そこには『願いの鈴』と書かれた看板が立てかけられている。

しかしその看板付近には鈴は無く、ちぎられた紐だけが落ちていただけだった。今日がクリスマスって言っても、本番は昨日みたいなもんだからな…。

諦めて戻ろうとした時、少し上の方に銀色の鈴が見えた。

あった。これだ。

僕はツリーによじ登り、銀色の鈴を手に掴んだ。

里乃が駆け寄ってくる。

「だめだよー。登っちゃだめって書いてあるよ。」

「いいんだよ。これくらいサンタの格好をした駅員さんも許してくれるって。」

木から飛び降りた時、着地に失敗して派手に転んだ。心配そうな顔した里乃が近づいてくる。

「大丈夫？今頭打ったんじゃない？」

「全然大丈夫。中林先生の蹴りの方がもつと痛い。」

僕はしっかりと握り締めた右手を里乃に差し出した。

「これ。プレゼントのお返し。…にもならないと思うけど。」

「鈴？私に？」

「これ持ってたなら幸せになれるんだって。あげるよ。」

俯きながら受け取った里乃は、小さくありがとう、と言った。

幸せになれる銀色の鈴を持つ手の平に、白い雪が落ちて溶けていった。

赤、水色、黄色、緑…七色の雪が空から降ってくる。まるで魔法にかかったかのような、それはそれは綺麗な雪だった。

「そっいえば…やばい。今何時だ！？」

「え… 6時半… あ！」

「あと30分しかないじゃないか！里乃、急げ！」

七色に光り終え、キラキラと輝き始めるツリーを背に僕らは走りだした。

クリスマスというイベントに特別な思い入れがあるわけではない。でも、そんな何かわからないけど良い日は、やっぱり良い日だった。

第11色目「ココロの情景」

よく夢を見ているようだった。

内容を説明できるほど記憶には残ってない。でも起きた時、ここにいる自分は夢のなかの自分なのか、本当にこの現実に存在している自分なのかわからなくなる。今日学校へ行けば、三年生が引退したばかりの9月1日かもしれない。そんな不透明な事を時々考える。枕元で激しく鳴る目覚まし時計を毛布のなかで確認した。

7時15分。

いつものように学校へ行き、いつものように下駄箱に靴を入れ、いつものように教室に入る。

二期の初めにやってきた転校生も、いつの間にか僕のなかの『いつも』になりつつあった。

ただ、少し違っていることが一つ。

僕の横の席に誰も座らない日が増えていた。

里乃が学校を休んで今日で二日目。部活用にいつも持っている大きなバンのだけが机に掛けてある。長いときで三日間、学校を休む時もあった。里乃は、軽い風邪、と言っていたが。

「水嶋、風邪こじらせちゃってるみたいだなー。」

そー太が里乃の席に座った。

「寒いからな。風邪も流行るだろうよ。」

「大丈夫なのか？」

「川村や委員長が様子見に行ったりしてるみたいだし、大丈夫だろ。」

僕の口から出た根拠のない大丈夫。全然心配していないと言えば嘘になる。しかし、前にも三日間休んだ後、元気な顔をして教室に現れた里乃は昼休みに僕達と普通に喋っていたし、放課後にはちゃんと部活にも出ていた。案外明日になったら元気に学校にやってくるのではないか。心のどこかでそう思ってる自分がいた。

「そっぴゃ、前から気になってたんだけど。お前マフラーなんていつ買ったんだ？」

そー太が微妙に鋭い質問をぶつけてきた。自分でもよく覚えている。防寒具といえる防寒具をあまり持っていなかった僕は、マフラーをぐるぐるに巻いたそー太を見て散々バカにした記憶がある。練習サボってるから寒いんだろ。子供は風の子だろ。寒さなど気合いで乗り越えろ、と。

「お前、マフラーなんか冬に負けたやつらがするものだって言ってたよなあー？」

里乃にもらいました。なんて堂々と言えるわけがない。里乃も恐らくその辺を配慮して色を黒にしたんだろう。いきなりお揃いのマフラーをした二人が入ってきたら、それこそ祭りになるぞ。もう朝からわっしょいわっしょいだ。

「これは。ほら、あれだよ…。」

「なに？」

「…冬に負けたんだよ。」

そー太がニヤリと不気味に笑って自分の席に戻っていった。なんだからよくわからない。わからないんだけど腹が立つ。

次の日、思った通りに里乃が元気な顔をして学校に来ていた。

「おはよ。」

「おう、おはよう。」

大丈夫か？と聞くと決まって、大丈夫、ただの風邪だから、と答える。

だからもう、病み上がりでも心配せず普通に接していくことにした。誰かが心配すれば、心配させまいと里乃が心配する。そういう性格なのだ、こいつは。

体力がないと自分でも言っていたし、体育の時間の里乃は驚愕するほどの運動音痴だった。体が強いほうではなく、やはり風邪をひきやすい体質なのだろう。

一時間目の授業が始まり、中林先生が延々と歴史年表を板書している。みんな必死にノートに書き写していて、僕も最初の方は真面目に書き写していたのだが、窓の外が気になったり、閉店セールのバールを眺めたりと、既に一時間目に捧げるやる気を失っていた。里乃が僕をツンツン突いてヒソヒソと呟く。

「もうすぐテストだよ。また赤点取っちゃうよ。」

「わかってるよ。」

「中林先生怒るよ。」

「わかってるって。」

「また勉強会やる？」

「いいよ、自分でやるから。」

そっか。と里乃は呟いて前を向いた。

窓から坊主になった街路樹を見ていると冬の寒さと寂しさをしみじみと実感する。

もうすぐテストか。勉強したくないな。

今日も練習か。こんな寒いのに。行きたくないな。

気分が落ち込んで頭がモヤモヤした。もうなんでもいいや、寝よう。僕はゆっくり目を閉じた。

あつという間にテスト期間がやってきて、更に気分は急降下。前回の反省を踏まえ、少しでも勉強してテストに望んだ。結果、両手を挙げて喜べないものの、頭を抱えるほどの絶望感もなかった。俗に言う、まあまあってやつだ。

すぐにテストは返却され、一番良くて55点、一番悪くて49点。自慢できる点数ではないが、赤点は回避できた。

三学期は早いもので。春休みがやってきた。春休みといっても、春季大会が控えているのでほとんど練習なわけだが。

少し早めにグラウンドに出て練習の準備をしていると、そー太が制服のまま駆け寄ってきた。

「春休みさ、二日間だけ休みがあるだろ？お前どっちが暇？」

「ああ、二日目は家の手伝いがある。一日目は暇。」

「じゃ、これ行こうぜ。」

そー太の手にはチケットが二枚。お洒落なデザインでこいつが持つてると妙な違和感を感じる代物であった。

「なに？美術館？」

「うん。川村にもらった。」

「行かないよ。興味ない。」

「なんだよー。行こうよー。俺暇なんだよー。」

チケットを見る限り、この辺りの中学、高校の美術部が合同で行う展示会のようなものらしい。なんでそー太がこんなものを。と思っ
たが、裏を見たらなんとなくわかった。

『おしるこ全員サービス』
これか。

「わかったよ行くよ。どうせ川村と水嶋も来るんだろ？」

「来ないよ。俺とお前のふたりつきり。」

「！？」

かくして僕達腐れ縁の、貴重な春休みを利用した美術館デートが堂々決定したのであった。

白い息を吐きながら両手をすり合わせる。
待ち合わせ時間をちょうど10分過ぎた頃だった。

「お待たせーダーリン！腹減ったよー！」

「お前完全におしるこメインだろ。あとその呼び方はやめてくれ。」

昼過ぎ。美術館の近くに集合した僕らは今から赴く未開の地へと足を踏み入れようとしていた。ここは国立図書館やコンサートホールが立ち並ぶ文化街であって、野球ばかりしてきた野郎二人にとって明らかに場違いな所だった。美術館なんて行ったこともないし見たこともない。一体どういう風に振る舞えばいいのだろうか。正装してないと追い出されるんじゃないか。何か特別な挨拶があるのでは……。

色々考えている間に美術館に到着し、そー太は足早に入場していった。

「おい、待てよ！」

僕もそー太に続いて入場した。

中はとにかく広くて、驚くほど天井が高い。両側の壁に絵が飾られていて、なんだか高級そうな匂いまでする。僕は、あまりの新鮮さと迫力で少し動揺した。これが美術館か。

「えーと、中庭だな。よーし！」

そー太がパンフレットを見ながら真つすぐに中庭の方へ行ってしまった。芸術よりも餅。それがあいつのプライオリティ。

せっかくだから、少し見て回ってから中庭に行こう。僕は順路へ向かって歩き出した。

美しい風景画、今にも動きだしそうな人物画。中には小難しい絵もあったが、どれもこれもすごいと思った。悲しきかな僕は単純にすごいと思えず、今感想を求められたら、絵が上手いです、とし

か答えられないだろう。自分の感性の貧困さに涙が出そうだ。奥の方に行くと大きな絵が何枚か飾られていた。

（あ、うちの美術部の作品だ。）

部長の絵は山に向かって飛んでいく鳥の絵と夕焼けが沈んでいく様子を描いた風景画だった。部長とは面識があまりないけど、すごく印象深い色を使って描く人なんだな。題名は『私の住む場所』なんかっこいい。

その横にある川村の絵には、野球のユニフォームを着た少年が描かれていた。

ん？こいつ、どこかで見たことがあるような、ないような。色がついてなくて、帽子の影で目もとが見えなくなっているのでよくわからないけど。題名は『恋』恋？

そういえば、さっきから里乃の絵が見当たらない。

たしかここにあるはずなんだけど。

辺りを見回し、振り返った時、僕は思わず声を上げてその絵を見上げた。

頭の中にあつた記憶が急速に、そして色鮮やかに蘇って僕をあの時のあの場所に引き戻した。

大きなクリスマスツリー。七色に輝き、無数の星の光に照らされた、駅前のクリスマスツリーだ。

僕はしばらくその場から動けなかった。あの時見たツリーがそのまま目の前に現れたからだ。

絵の下には大きな花飾りがついていて『審査員特別賞』とあつた。

（特別賞…すごいな。）

題名『幸せをもらった日』水嶋里乃。

季節外れのクリスマスツリーが、再び僕を七色に染めていった。

短い春休みも終わり、まだ寒さの名残を感じながら学校へと急いだ。少し遅めの登校時間に油断した僕は寝坊してしまい、予定時刻より約10分遅れて校門をくぐった。

桜がもう満開になっていて、花びらが舞散る中庭へと足を運ぶ。

今日から中学三年生。

クラスが変わるのだ。

（えーと、俺は…。）

あった。三年三組。また三組か。

そー太とブランカ、タカさんまで一緒だ。中林先生が裏で仕組んでいるのがバレバレだった。

なるほど。あいつは一組で。あいつは四組か。あれ、タカさんの彼女は二組ではないか。タカさん可哀想に。

（あつ……。）

里乃は五組だった。

三組と五組。その距離は何故かとても遠く感じて、見えない壁がその空間ごと引き裂いてしまったような、そんな感覚に襲われた。

第12色目「里乃」

新しい教室に入ると既にホームルームが始まっており、中林先生が目を細めて僕を見ていた。怒鳴るぞ。怒るぞ。ほら。

「早く座れ。」

意外なことに、中林先生は一言そう言っただけでホームルームを再開した。怒られる覚悟をして教室に入った僕は拍子抜けして座席表に書いてある自分の席についた。

頬杖について眠そうにしているそー太、僕を見てニヤニヤしているブランカ、背筋を伸ばして前を向いているタカさん、前列の席に委員長と川村もいた。

「改めて言うが、今日から三年生や。今年は受験も控えているからな。気合いを入れ直すように。」

中林先生のいつもの低い声が教室に響いた。

三年三組は二年生の時と同じ校舎の一階にあり、一組、二組は二階、四組、五組は三階になっていた。

一階と三階、里乃との距離は遠く、三年になってからは全くといっていいほど会う機会もなくなっていった。

今、僕の横の席にはバスケット部の女子が座り、一日に一言二言話すだけほとんど会話もなかった。

知っている人がすぐ隣にいて、知らない人がいるのでは随分世界が違うように感じる。

この環境にもすぐに慣れて今の居場所が僕の中の全てに塗り替えられるのも時間の問題だろう。でも、里乃がいたあの場所はとても懐

かしくて暖かくて、紛れもなく僕の小さな世界の全てだった。
僕は哀れだ。今になってあの時間が恋しい。

それからの毎日はなんとなく流れ、食堂で再び井物をかきこむようになり、景色の良くない窓の外を眺めながらぼんやりと過ごした。

里乃に会ったら何を話そう。文化祭の事を、マフラーの暖かさを、クリスマス会の思い出を、あの絵の素晴らしさを。

そんな事を、時々考える。自分でもおかしく思うんだ。里乃は三階にいるじゃないか。会いにいけない。でも自分の中の何か変なもの僕をそれ以上前に進めず、いつもこうして思いだけを燻らせた。

部活もいよいよ忙しくなつて、あつという間に春季大会を迎えた。

弱小で有名なうちのチームはあっさりと一回戦で負け、夏の最後の大会に向けて練習は更に加速していった。朝練に放課後の通常練習、それから筋トレに素振り、走り込み。練習は夜遅くまで続く事がほとんどになっていた。

高校受験を心配した母が僕を無理矢理塾に通わせるようにもなり、まるで流れ落ちる滝のように、時間だけが過ぎていく。

そんな忙しい毎日が僕の中の『いつも』に変化していきこうとする、そんな梅雨のある日のこと。

「里乃、体調を崩してるみたいで…。」

雨音が響く放課後の教室で川村にそう告げられた。

もう一週間も学校に来ていないらしい。これにはさすがに僕も動揺していた。

「お見舞いには行ってるのよ。元気そうに振る舞うけど、やっぱり

辛そうだった。」

ただの風邪、それだけで一週間も休むのか？体力がないだけ、本当にそれだけのことなのだろうか。

「お願い。一度里乃と会ってあげて。」

放課後、僕はタカさんに練習を休むことを伝えて学校を飛び出した。どうしたんだ？と尋ねるタカさんに僕は正直に、里乃が一週間学校を休んでいる、と伝えた。

夏の大会前に、しかもレギュラー入りしている三年生がこの時期に練習をサボるなんて非常識極まりない事。それは十分わかっている。わかってはいるんだ。

「そうか。よし、中林先生には俺が上手いこと言っておくわ。他のやつらが文句言っても俺が黙らせてやるよ。早く行け。」

タカさんはそう言っ、僕の背中を押してくれた。

激しい雨が僕の傘を叩く。川村からもらった住所を頼りに僕は走った。

里乃の家は僕の家からずっと向こう、文化祭の帰り道に話した公園を通り過ぎてしばらく歩いた先の小さなアパートだった。

傘だけでは回避しきれなかった雨が僕の肩を濡らし、もうすぐ夏だというのにひどく寒かった。

（ここで、いいんだよね…。）

表札には大野と書かれていた。水嶋の表札がないことに少し戸惑ったが、傘を折り畳むと同時に思い切って玄関のチャイムを押した。

「はい。」

「あの。突然すみません。水嶋里乃さんと同じクラスメイトの…。」
出てきたのは品のあるお婆さんだった。背はとても小さく、朱色のカーディガンを羽織ったお婆さんは優しそうな笑顔を浮かべて部屋の奥へと招いてくれた。

「ごめんなさいねえ。今、里乃は寝ちゃってるのよ。よかつたらお茶でも飲んでいって。…あらあら、制服濡れちゃってるわね。乾かさなくちゃ。」

すみません。そう言ってお婆さんに上着を渡し、居間に座らせてもらった。

部屋の中は暖かく、大きなキャンバスやたくさん種類のある絵の具セット、色んな形をした筆やペンがテレビの横に置かれている。本棚にはいくつか写真が立て掛けられていて、よく見慣れた制服姿の里乃がお婆さんと二人で写っている。その横にはまだ幼い里乃が可愛いドレスを着て、笑顔の素敵な男性と女性と一緒に写っている写真があった。恐らくお父さんとお母さんだろう。お母さんの方は今の里乃と同じ顔をして笑っている。よく似た母子という印象を受けた。

写真はその二枚だけ。

ここで里乃は家族と一緒に暮らしてるのか。

「あまり良いおもてなしができてなくてごめんなさいね。」

「いえ、こちらこそおかまいなく。いただきます。」

「いつも仲良くしてもらってるみたいで。本当にありがとねえ。」

お茶を飲みながら少し照れ笑い。お世話になっているのはいつも僕の方だ。

「あなたのお話はいつも里乃から聞いているわ。楽しそうに話すのよ。」

「そうですか。」

「この前なんかケーキ作るのにはりきっちゃって。何度も作り直してたわ。」

あのケーキの舞台裏が聞けて面白かった。分厚くクリームが塗られたショートケーキは、甘さ控えめで優しい味がした。里乃らしいケーキだったことを覚えている。

しばらくお婆さんと色んなことを話した。僕が野球をやっていること。里乃の絵が入選していたこと。学校でのこと。

お婆さんは楽しそうに僕の話聞いてくれた。

「あの二人で写っている写真は、こちらで撮られたんですか？」

「ええ。こっちに引つ越してきた時にね。」

「前は水嶋、東京にいたと聞きました。」

「あの子、学校を転々としてるのよ。その前は北海道にいたの。」

「そうだったんですか。」

「私はずっとこっちに住んで、里乃が来てからは二人暮らしをし

ているのよ。毎日楽しくていいわ。」

「二人暮らしなんですか？ご両親は…お仕事の都合か何かでしょうか？」

お婆さんが一瞬、寂しそうな笑顔を見せたのを僕ははっきりと覚えている。

「あの子のね…両親はもういないのよ。」

え…？

「小さい時にね、交通事故で両親を亡くしてるのよ。あの子の誕生日の日にね、プレゼントを買いに行ったまま…そのまま…」

ごめんなさい。そう言ってお婆さんは涙を拭った。

何かを言おうとしても、僕の口が動いてくれない。手が震えて、脈打つ音が響いた。

「それから東京の親戚の家に預けられたんだけど。ちょっと訳あってね。こっちに引っ越してきたの。」

「…はい。」

その言葉を、目の前の現実を、僕はただ受けとめるしかなかった。

「里乃ね、心臓の病気なのよ。療養のためにこっちに來たの。大人になるたびに体力が落ちていく病気で。あの子が小学生の時にそれがわかってね。」

体力が人より無いことも、学校を休む理由も、里乃が慌てて隠した薬も、転校初日に昼から現れたことも、この時全てが一本の線で繋がりが、同時に里乃のあの笑顔を思い出した。胸を切り裂くような痛さと、どうしようもできない感情が流れ込んでくる。

「人と上手く付き合えなくなったのも、あの事故からなのよ。学校を何度も変わったでしょう。だから友達もできなくて、自分からも話し掛けることが怖かったみたいで。寂しい思いをしてたと思うわ。自分からは言わないけど。」

「そう…でしたか。」

「だからあの子が学校の話をいっぱいしてくれるようになって、楽しそうにしてくれているのを見て、私はすごく安心してるのよ。」

そう言ってお婆さんは笑った。

「あなたには、本当に感謝しています。いつもありがとうね。」

外に出ると雨はまだ降り続いていて、もうこのままずっと止まないんじゃないかと思っただ。雨音だけが僕の傘に不規則なリズムを刻んでいる。

静まり返った公園。あんなに早く流れていた時間が今は動きを止めたように感じる。

僕だけこの世界から切り離されて、取り残されてしまったかのようにだった。

（できるだけ、里乃には楽しい思い出を持ってて欲しいの。これからもずっと。それだけが、私の願いなのよ。）

お婆さんが最後に言ったこと。それが頭のなかを回って、僕は何度も何度も噛み締めた。

どうしようもない思いが少しずつ形を変えはじめた時、今まで堪えていた感情がプツリと音をたてて弾けていった。

見上げた空はどこまでも暗く重い。

いつか、あの雲の隙間から光が射して、再び僕らを照らしてくれるのだろうか。

僕は思った。里乃は、雲の上にある太陽みたいだと思う。

何があっても笑顔を忘れない強さ。辛くても一生懸命頑張れる強さ。決して負けない、決して折れない心を持っている。

里乃のことを、暗くて地味だなんて誰が言った。

僕らより、ずっと強いじゃないか。ずっと強いじゃないか、あいつは。

なんなんだよ。誰なんだよ。それ以上、里乃を苦しめるのは。里乃から奪っていくのは。

もういいだろ。お願いだから…もう、いいだろ…。

頬を濡らしたのは、空から落ちてくる冷たい雨だったのか、それとも僕の涙だったのか。

その日、雨は明け方まで降り続いた。

第13色目「やくそく」

今日は朝から嬉しい話と嬉しくない話を聞かされた。今日、里乃来てるよと川村から聞かされたのはそれから三日後のこと。

すぐに五組まで里乃の顔を見に行った。息を切らしながら突然現れた僕を驚いた表情で見ていた里乃。

すぐに笑顔になって、おはようと声をかけてくれた。

嬉しくない方の話もしよう。

俺彼女できたわ。とそー太から直接聞いたのは僕が五組から戻ってきた時のこと。

ついに自分の耳がおかしくなってしまったと思い、何度も聞き返したのだが、そー太は彼女できたわとしか言わない。あらゆる角度で疑ってみる。ブランカ辺りが仕組んだどつきりじゃないのか。何かの罰ゲームじゃないのか。そー太の脳内で思い切った革命が起こってしまったのか。

「なんだって？」

念のために三度聞き返してみた。

「だから彼女できたって！」

「嘘だろ。嘘だと言え。」

「マジだよ。コクられたんだよ。」

「それはどこのマニアックな人だ？」

「川村。」

なんだってー！と僕の中の脳みそ会議室が悲鳴をあげる。それが神経を伝わって口から出る瞬間、僕はその言葉を飲み込んで納得していた。

以前、美術館で見た川村の絵。どこかで見たことのある野球少年はそー太だったのだ。

『恋』と名付けられたその絵。川村はあの時から、いやもつと以前からそー太のことを想っていたのか。

「やっぱり。まあ頑張れよ。」

「ちよっ！悔しがらないの？やっぱりって何？なあ待ってよー。」

そー太を置いて僕は音楽室に向かった。一時間目は音楽だ。寝よう。

放課後を告げるチャイムと同時に、クラスメイト全員が一斉に立ち上がる。

今日は何しよつかー？とクラス中に笑顔が弾けていた。

本日、職員研修のため全クラブ活動が休みになっているのだ。

忙しすぎる毎日の中に、いきなり休みができてしまうと何をしたいのか戸惑う。と言っても、忙しくなくてもそうな訳だが。

これは無趣味な僕の宿命なのだろう。

川村とそー太が僕の方を見て手を振っている。

今からデートなのか。その背中を見送りながら染々思う。

二人が教室を出たと思ったら川村だけが戻ってきた。

「ちよっと良い情報。里乃、今なら部室で画材道具整理してるよ。」

川村はフフンと笑って再び教室を出ていった。

美術室は音楽室のある校舎、一階奥に位置していて授業以外ではめ

ったに来ることはない。ちょうどそー太と昼食後、ジュースを飲んでいる中庭の裏手にあって、放課後は吹奏楽部と美術部の籠城と化している。

薄暗い校舎に入ると、埃っぽい臭いと色が変色した貼り紙がベタベタ貼られている。なんだか不気味だった。美術室に続く廊下に出ると、大きなカバンを抱えた里乃と出くわし、二人同時に声を上げた。

「うわ、びっくりした。」

「あ、びっくりした…。」

少しの間があいて、僕らは笑いあった。

「どうかしたの？こんなところに。何か忘れ物？」

「いやあ…えーと。そうだ、探検。探検してんの。」

「探検？」

里乃が笑いながら首をかしげている。とっさに出た誤魔化しの台詞はあまりにも嘘っぽくて幼稚で、我ながら冷や汗が出た。

「探検で何かみつかった？」

「うん。見つけたよ。」

僕は里乃の大きなカバンをひょいと取り上げて一緒に帰ろうと誘った。

カバンは思った以上に重く、何度も持直しながら校門を出た。里乃は、もういいよ、私が持つよ、と言っていたが、それこそこんな重いものを里乃に持たせるわけにはいかなかった。

何度も意地を張る僕に納得してくれたようで、里乃はありがとと呟いた。

「なあ、甘いもの食べたくないか？」

「うん、食べたい。」

「アイスでも食べにいく？でも今日ちょっと寒いからな。クレープにするか？」

「アイスがいいな。」

「よし、アイス行こう。」

もうかれこれ二年以上、閉店セールをやっているデパートの地下に少し高いけど美味しくて人気のアイスクリーム屋がある。

あまり僕は行ったことはないのだが、時々クラスの女の子からこのアイスクリーム屋の話題が出ていたのは知っていた。

「俺イチゴ。」

「私も。」

お会計はご一緒で？と言う店員に、僕は渾身の力を込めて千円札を叩きつけた。一度言ってみたかったんだ。

「一緒で。」

さっきまで曇り空だったのに、何時の間にか太陽が顔を出していてポカポカ暖かった。僕達はアイスを食べながら少し遠回りした。

近くの河原では小学生達がキャッチボールをしている。六月とは思えない、爽やかな風が気持ち良い。

河原のベンチに腰掛けて、しばらくそのキャッチボールを眺めていた。

まだ小さい僕とそー太、ブランカ、タカさんが河原でキャッチボールをしている影を重ねながら。

里乃の方を見ると、僕らの目が合った。照れ笑いの後、里乃はすぐに目をそらした。

「ごめんね。」

「何が？」

「この前来てくれたんだよね。」

「ああ、いいよ。」

里乃が俯いて、手を前に組んでもじもじしている。

「あのね、私ね…。」

「最近の風邪は長引くからな。」

僕は言葉をかぶせた。

里乃がキョトンとした顔でこっちを見ている。

「帰ったら手洗いうがいだ。それでもまた風邪ひいちゃったら、またお見舞い行くから。」

里乃はえへへ、と笑った。僕も笑う。

里乃が今、病氣のことを告白しようとしたのがなんとなくだけわかった。

でも今横にいる里乃は元気に笑っている。それだけでいいと思った。病気だからとか、そんなもので里乃との関係が崩れるわけがない。里乃は里乃だ。そのままの里乃で、そのままの僕で、これからもうずっと…。

「あ、そうだ。」

里乃が嬉しそうにカバンの中から取り出したのは一枚のチラシだった。

これからやってくる夏を感じさせるような、水玉模様の涼しげなチラシ。

「これ。」

「お、河原でやってる花火大会のチラシか。」

「うん。一緒に行けたらなって。」

「うんうん。行こうよ。いつ?」

「8月17日。あ…でも。野球の大会あるよね。」

「試合は8月頭からだし。全然大丈夫。行けるよ。」

「よかった。私、花火大会に行くの初めて。」

里乃のとびきりの笑顔。ずっと見たかった笑顔だ。

僕にはこんなことしかできないけど、できるだけ里乃を笑わせてあ

げたい。

この夏で部活も引退する。それからはいくさんたくさん、里乃の思い出を作っていこう。そう思った。

里乃は頭がいいけど、できたら同じ高校にも。本人には言わないけど、僕はこんなことも考えていたんだ。

「この花火凄いいんだぞ。何千発も打ち上がってさ、人もいっぱい来て。ちょっと混むけど大丈夫。特等席知ってるから。夜店も出てさ、昔そー太が夜店で…。」

里乃といろんなことを話した。自分でも驚くくらいによく話した。うんうん、と一言一言噛み締めながら頷く里乃。山の向こうに日が沈んで、いつの間にかこの街に夜がやってきていた。このままずっと、時間が止まってしまえばいいのに。もう朝なんか来なければいいのに。

「約束。」

僕らは小指と小指を堅く結んだ。里乃の手は、白く、細く。交わした約束はとても暖かなものだった。

第14色目「僕が得たもの、そして」

入道雲から姿を現した太陽がどんどん地上に近づいてくる。

セミの声が耳に入って、この街を騒々しくさせた。

刺さるような陽射し、肌にとわりつく湿気。

僕の家窓は全て解放され、扇風機が一台、僕の部屋にやってきた。あんなにも嫌っていた夏ってやつだ。

でも今年は少しだけ、いつもと違った。少しだけ。

テストが終わると部活は息つく暇もないほどで、一日のほとんどの時間はユニフォームを着て過ごした。

そー太やブランカと、これでもかと言うほど毎日顔を合わせる事に、いい加減うんざりもしていたが、中林先生の気合いの入りようと周りの高いモチベーションによって、自然と僕の中にあつた火種は勢いを増して燃え上がっていった。

「よし、ダッシュ10本行ってこい！その後は素振り300本や
！」

「はい！」

焼けるようなグラウンドに、夏が降り注ぐ。

8月頭に開催される夏の大会。その予選が地元の市民グラウンドにて行われる。一回戦は、奇しくも冬に練習試合を行ったあの隣町中学だ。

「前回の試合を思い出せ！」

中林先生はそれだけ言ってプレイボールを待った。

努力した分だけ、結果がついてくる。中林先生がいつも僕達に言っていた言葉を胸に、予選が始まった。

一番打者のそー太が出塁し、二番がそー太を二塁へと送る。三番のヒットにより一、三塁となった時、相手チームは四番のタカさんをバッターボックスに迎えた。練習試合と同じ展開に、タカさんの顔が少し強ばっている。

「タカさんなら大丈夫。リラックス。」

僕はバッターボックスに向かうタカさんを見送った。

誰よりも真面目に頑張ってきたタカさんなら、きっと打てる。僕は信じていた。

試合終了後、控えめにガッツポーズをしている中林先生を見て僕は少々驚いていた。普段こんな感情表現はめったにしない人だからだ。

「よくやった。お前等の頑張りで勝てたんや。」

それは、公式戦での初勝利だった。

それから波に乗った僕らのチームは順調に勝ち進み駒を進めていった。

勝つたびに中林先生のガッツポーズも大きくなり、僕達の自信も大きくなっていった。

努力した分だけ、結果がついてくる。

この言葉がとても力強く、頼もしく感じた。

準決勝を勝利で飾ったその日の夜。僕は里乃と会った。文化祭の時、二人で話したあの公園で。どうしても僕は、準決勝で勝てた事を里乃に伝えたかった。

「そつか。すごいよ、本当にすごいことだよ。よかったね、本当によかったね。」

里乃はまるで自分のことのように喜んでくれた。

「あ、良いこと考えた。ちょっとここで待ってて。」

そう言つて里乃は、いつも持つ大きなカバンを家から持ってきた。

「そのカバンに付いてるのって…。」

「そう。幸せの鈴。」

里乃は鈴をカバンから取り外し、マジックで何かを書き始めた。

「はい。これ持つて。お守り代わり。私、応援してるから。」

街灯に照らされ銀色に輝くその鈴には、僕の名前と里乃の名前が書かれていた。

「幸せ、君にもきつと届くよ。」

里乃は笑っていた。いつものように。

決勝戦。まさか自分がこの場所に立てるなんて思いもしなかった。僕だけじゃない。恐らく誰もがそう思っているだろう。

電車をいつも二本乗り継いで、やっと到着するこの大きなグラウンド。

今日は貸し切りのバスが出て、大勢の保護者や先生達と一緒にこの

グラウンドへやってきた。

勝っても負けても俺は後悔しない。ただ、お前等の全力を見せてほしい。

中林先生は試合前、手を震わせながら僕らに言った。中林先生が緊張している。それがすごく伝わってくる。

ポケットに入れた、幸せの鈴を握り締めた。

もう、僕には迷いなんてない。

近くの小学校で野球クラブがあるらしい。母がそう言って僕を野球クラブへ放り込んだ。両親が共働きで、婆ちゃんもお店をやっていたため、夕方までやんちゃな子供を預かってくれる野球クラブはとても有り難かったんだと思う。

そこにいた奴らと、練習が終わっても学校に残って遊び続けた。

夜になっても帰らない僕らを見つけた先生が、よく怒ってたのを覚えてる。

なんとなくいた場所、それこそが僕の居場所だった。なんとなく過ごした時間、それがかけがえのない大切なものだったなんて。

こうして大切な仲間と大切な時間を共有している。同じ時間、同じ毎日。

そんなものは二度とやってくるはずがない。

今、この瞬間こそが僕達の全てだったんだ。

ゲームセットの音が、真夏の夕空に響く。

手に残るあの感触を実感する暇もなく、僕らは抱き合った。

地区予選で優勝を果たした僕らは、全国大会に出場すべく、大きな荷物を持ってバスに乗り込んだ。

これから遠い地で、試合に負けるまで戦いは続く。

一回戦、二回戦…遠いところで同じ白球を追いかけてきた者達は、やはり強く、毎回毎回ここで終わりか、と諦めかけた。

それでも少しだけ、本当に少しだけ僕らの方が強かった。

ベスト8まで残った東京との試合。その日が僕達の最後の試合となった。

試合に負けた後、僕は少しも悔しくなんてなかった。きっとみんなもそうだと思う。一礼してグラウンドを去るとき、みんな笑っていた。

当たり前か。

あんなに弱かったチームが全国大会でベスト8まで残ったんだ。

僕達の夢の先、遙か先に行ったところの到達点。そこまで一緒に行けたこと。

中林先生だけが、涙を流しながら僕らに言ってくれた。

「自分を誇れ。仲間を誇れ、と。」

その日のうちに僕らはバスに乗り込んで、故郷を目指した。途中のパーキングエリアで中林先生が全員分の夕食をご馳走してくれて、ビールをたくさん飲んだ先生はそのまま家に到着するまで起きることはなかった。

夜の高速を走るバス。寝静まった車内。大きなトラックが次々バスを追い越していく。

高速道路を照らす光が、時々車内をオレンジ色に染めて、少し寂しくなった。

眠れない。

こんなに疲れているのに、眠れない。

淡い黄緑色したデジタル時計が23時を知らせている。

窓の外を眺めた。流れる景色。流れた時間。

僕の街の明かりが見えてきた。

バスが左に進路をとろうとする方向指示器の音だけが、カチカチと車内に響いている。

（里乃…。）

8月20日が、もうすぐ終わるようになっていた。

第15色目「夏が終わる時」

蒸し暑さとセミの鳴き声で朝早くに目が覚めた。
急いで部活用のカバンを持って部屋を飛び出す自分が可笑しくな
った。

今日からもう、部活はないんだよな。

「夏休みだからってダラダラしてたらあかんで。」

居間で寝転がりながらテレビを観ている僕に母が言う。掃除機をか
けているのに大の字に寝転がる息子が邪魔らしい。
のそのそと起き上がって自分の部屋に戻った。扇風機のスイッチを
入れて、再び寝転がる。

（花火大会、楽しみだね。）

その言葉がずっと浮かんでいた。約束していた花火大会。
一回戦、いや、少なくとも予選で夏が終わる。そう思っていた。
まさか全国大会まで行くなんで。それは僕にとって嬉しいことだ。
嬉しいことなだけど。

あの時、堅く結んだ小指をなぞりながら里乃のことを想った。

約束、守れなかったこと。学校が始まったらすぐに謝ろう。そして
これからは、色んなところへ行こう。楽しい思い出をたくさん重ね
て。今度こそ。

母の声が聞こえた。

「そー太君来たわよー。」

少しの夏休み。

それからの僕らは毎日のように遊んだ。そー太、ブランカ、タカさん…。朝になると必ずそー太が迎えに来て色んなところに連れていってくれた。まるで小学生に戻ったみたいに、毎日毎日夜遅くまでバカをやったんだ。

ずっと引つ掛かっていた罪悪感を拭い去るように。

9月1日。

制服に着替えていると母が薄い冊子を僕に見せた。

「お婆ちゃんがこれ老人会から貰ってきたの。梨狩りと紅葉のライトアップがもうすぐあるみたいよ。無料みたいやから、お婆ちゃんとお母さんと一緒に行かない？」

「行かないよ。」

そう言って家を出ようとした時、これだと思った。

「母さん、その冊子貸して！婆ちゃんに言ったら無料になるよな？」

「なると思うよ。お母さん達と行かないの？」

「友達と行くよ。早く貸して！」

僕は冊子を抱えて学校へと急いだ。今度は僕から里乃を誘ってやるう。

たくさんたくさん、色んなところへ誘ってやるんだ。去年の今日。つまらなさそうに頬杖をつきながら窓の外を眺めていた。その時感じた涼しい風がまた吹いた。

早く里乃に会いたい。

下駄箱に靴を入れて廊下に出ると、川村が壁にもたれかかりながら誰かを待っていた。

「おう、おはよう。」

いつもなら元気いっぱい挨拶をしてくる川村だが、今日は表情が暗い。挨拶も返ってこない。

そー太と何かあったのだろうか。

教室に向かおうとすると、川村は何も言わず僕のカバンを引っ張って中庭に連れていった。

「あんた、今まで何してたのよ…。」

肩を掴まれ校舎の壁に押しつけられた。

僕は川村の曇った顔に少々驚いていた。

「何って…。野球の試合…」

「わかってるよそんなこと！」

掴まれた肩にますます力が入る。少し震えているようにも感じた。

「わかってるよ…そんなこと…全部わかってる。」

「なあ、川村。一体どうしたんだよ。里乃のことか？なら今から謝りに…」

「…遅いよ。」

川村が何を言っているのか、僕に何を伝えたいのかわからなかった。

一瞬思考が停止して周りの音が何も聞こえなくなった。

「え？」

「遅いよ…もう…」

川村が俯くと涙が落ちた。ようやくその言葉を飲み込むと川村は僕の肩から手を離れた。

「里乃ね、東京に戻ったの。」

小さな口から出たその言葉を理解できるわけがない。再び僕の中に侵入した言葉に戸惑い、耳を疑う。

「川村、お前何言ってるんだよ？」

「里乃が東京に転校したの！もう謝りに行っても遅いのよ！」

「…嘘だろ？なんで…。いつ、いつ里乃は…」

「8月の18日。夏休み前にね、お婆さんが体調を崩して入院されたの。だから、東京の親戚のところへ戻ることになって。」

あの時約束した、花火大会の次の日だった。その日、里乃は…。

「惣太に連絡したの。惣太から伝えてあげてって。でも今は部活が終わったばかりだからって。」

「…知らなかったの、俺だけか？知らなかったの俺だけかよ！」

視野がどんどん狭くなつて景色が灰色に見える。
校舎も、空も、雲も。全てが違う世界のものに見えた。

「里乃もずっとあんたに言おうとしてた。でも…。」

「…。」

「花火大会の日だね、言おうとしてたんだって。あなたとの、最後の日だからって。今までのことも、里乃の気持ちも全部。」

「……。」

「でも…でもね…あんたから全国大会に行けるかもって…嬉しそう
なあんたからその話を聞いたって…。」

噛み締めて押し殺していた感情が押さえ切れなくなつて涙が溢れた。
自分でもどうしようもできないくらい重く、痛い感情。

それがどんどん僕を支配していく。

公園で、鈴を渡してくれた里乃。

これで会うのが最後かもしれない。

そう思っているながら、里乃は僕に鈴を託した。

願いが叶うように。

きつと里乃は、決勝前の僕を心配させないよう、自分の転校を黙っ
ていたんだ。本当は伝えたかったはずなのに。
それでも里乃は笑顔で僕を見送ってくれた。

（私、応援してるから。）

思い詰めていた里乃の覚悟を…僕は…。
始業のチャイムが響く。

今まで手に持っていた冊子がバサリと地面に落ちた。

それからしばらく涙はとまらなかった。

また気持ち良い風が僕達を撫でていく。懐かしい、夏の終わりの匂いだった。

「夏の宿題はちゃんとやったやろなー？勉強はお前等の仕事やぞ。もうすぐ文化祭もあるから…」

中林先生がいつものように夏休み明けの話をしている。周りでは夏休みの楽しい思い出話に花が咲いて、女子達はやはり彼氏の話で持ちきりだった。

「夏休み彼氏と旅行行って…」

「うそーまじでー。でも私も花火大会にー…」

見慣れた景色、聞き慣れた話。去年と同じ9月1日。

一階の窓の外をボンヤリ眺めてみる。

世界は灰色のまま動かない。

中林先生が黒板に何か書き始める。

こんなに切実に思ったことはない。

中林先生が黒板に「お知らせ」と書いてくれることを。

昼過ぎになったら、教室に転校生が現れてくれることを。

中林先生が前を見て再び話はじめた。黒板に「お知らせ」の文字はなかった。

「なあ、ご飯。いくか？」

「え？ああ、そうだな。」

そー太が少し遠慮しがちに近づいてきた。うわの空だった僕に気を

使っているのがわかる。

「ブランカとタカさんと一緒に食おうぜ。」

「そだな。」

「あ、今日お前んち行っていい？めっちゃ面白いゲーム持ってくわ
！」

「うん。」

長い付き合いだ。よくわかってる。そー太は近づきすぎず、離れすぎずで僕を励まそうとしてくれていた。

でも今は、そー太の優しささえも痛く感じる。

そー太に応えてあげられない僕が情けない。

下校の時間になり、僕はタカさんと掃除をして、そのままカバンを持って焼却炉にゴミを捨てに行った。

帰る前にちよつとジュースでも飲むか、と言うタカさんに付き合つて中庭に腰を下ろす。

「なにいつまでウジウジしてねん。ほら。」

タカさんがジュースを差し出した。

「飲めよ。」

「ありがとう。」

タカさんは僕に野球部の今までの楽しかったことや昔の思い出話を

してくれた。

タカさんが合宿でパンツを忘れてノーパンで過ごしたこと。そー太が夜中ホテルを抜け出したはいいものの迷子になって泣きながら中林先生と帰ってきたこと。

僕達がベスト8までいけたこと。

タカさんの話を聞いて、少し元気をもらえた。

「お前、そのカバンについてるのって…駅前のツリーのやつ？」

僕はいつも鈴をカバンにつけている。

幸せを呼んでくれる思い出のお守りだから。

「ああ、これ？うん、そうだよ。」

「お前がもらったんだ？」

「いや、俺があげただけだ。決勝前に…お守りって。」

タカさんは、そっか、と言って立ち上がり大きく背伸びをした。

「じゃあ、返せばええよ。あげた人に返してやれ。その鈴も、それを望んでるはずや。」

タカさんは笑いながら肩を組んで、耳元でこう言った。

「もらった分は、返してやれ。男だろ？」

そー太が半泣きで中庭にやってきた。

「なんだよー、ここにいたのかよー。てっきり置いて行かれたのか

と。
」

「すまんすまん。じゃ帰るか。早くゲームやろうぜ。」

僕は歩きだした。

ポケットにずっと入っていた紙切れを握り締める。

今朝、川村から渡された一枚の紙切れ。それだけが今の僕と里乃を繋いでいた。

今の僕には、東京はとても遠い場所のように感じる。

第16色目「想い」

「地図とお金と。あとは…。」

通学用力バンに必要な最低限の荷物が入っているか、再度確認する。
入れ忘れは厳禁だ。今回はちょっとした旅になる。

「あとはこのメモ書きを持って。よし。」

まだ辺りが薄暗い早朝4時。車通りの少ない道でようやくタクシーを拾った。

カバンを抱えながら体が暖まるのを待つ。3月といっても、朝方の冷え込みは厳しい。

川村から告げられたあの日から、時間は急速に僕らを運んでいったように感じる。それでも季節は規則正しくやってきて、この街に雪を降らせ、桜を咲かせた。

地元の公立高校に進学が決まった僕は、短い春休みを利用して東京に行くことにした。

今日から野球部連中も隣県にある遊園地へと二泊三日で遊びに行っている。

そー太やタカさんから何度も誘われたが、どうしても言う僕に渋々納得してくれたようだった。

ようやく体が暖まってきて、僕はカバンからメモ書きを取り出した。住所だけが書かれたその紙には、僕の不安と希望が全て詰まっている。

里乃は今何をしているのだろうか。何を思っているのだろうか。
心が溢れて、歯を食い縛った。

「一番ホーム到着の列車は、東京行き…」

まだ人の少ない新幹線のホームで朝ご飯にさつき買ったおにぎりを頬張る。

もう6時を過ぎているはずなのに空は暗く、重たい雲が覆っていた。新幹線に乗るのも、東京に行くのも初めてのことだ。何もかもが初めてですごく心細かった。

新幹線に乗り込み、何度も何度も乗り換えの路線図を確認した。蜘蛛の巣みたいになり巡った東京の地下鉄は、まるで別の世界のことのように感じる。

窓の外は、すぐに知らない風景に変わった。

上手く行けるといいんだけど。

切符を握り締め、目を閉じる。列車が走る音を聞きながら、僕は眠った。

昼前になり、東京駅に到着した僕は改札を出て立ち尽くした。

人の大群に飲み込まれそうになり、慌てて改札を離れた。

人がどんと出口に吸い込まれていく。途切れることのない人、そして声。

ここが、東京か。

電光掲示板に次々と情報が流れる。乗り換え、遅延……ここではこんなにも色んなことが起きて、そして消えていく。

一つ深呼吸してから人波に飛び込んだ。早く乗り換えの地下鉄を探さない。

駅の迷路は複雑で、たくさんの矢印を何度も通り過ぎた。

やっとのことで券売機まで辿り着き、切符を買った。

ここから二駅乗って、また乗り換える。それからしばらく行ったらころがメモに書いてある住所の最寄り駅だ。地図を指でなぞりながらはるか遠くに位置する駅を確認した。

電車が到着する音がして、僕はホームに走った。

どれくらい電車が揺られていたのだろう。空のてっぺんまで昇って

いた太陽が沈みはじめている。地下から地上に出た電車はいくつもの駅に停車し、いくつもの駅を通り過ぎた。

建物ばかりだった景色が、どんな何もない景色に変わった。

全く読めない駅名をみて、僕の知る場所からとても遠いところまで来たことを実感していた。

くしゃくしゃになったメモ書きを再び握り締める。不安だけがどんどん大きくなっていく。

すごく恐かった。

目的の駅に到着したのは家を出てから10時間後のことだった。静かな場所で緑がたくさんある。小さくてきれいな店が立ち並んでおり、僕の街と少し似ていた。タクシーの運転手が駅前で談笑しているのを見ながら地図を確認。

（こつちでいいんだよな。）

何度も確認した地図なのに、いざ到着してみるとどこへ向かえばいいのかさっぱりわからなかった。

地図をくるくる回しながら歩く。今の僕の位置を把握しながら、周りの建物と照合しながら。

やがて小さな神社が見えてきて、桜がたくさん咲いている坂道に出た。大きな家が上の方まで並んでいる。そこに書かれていた住所とメモ書きの住所が近くなってきたのを確認して、少し嬉しくなった。

（じゃあ、この坂道をのぼれば…。）

里乃のことが浮かぶ。

突然行ったらどんな顔するだろう。なんて言うだろう。怒るかな、笑うかな。

話したいことがたくさんある。伝えたいことがたくさんある。
でもまずは、謝りたい。
僕は走った。

その家は街を一望でき、桜の坂道を見下ろすことのできる場所に建
っていた。ここからの眺めは素晴らしいものがあって、さつき乗っ
てきた電車があんなに小さく見えている。

電柱に書いてある住所とメモ書きの住所がぴったり一致した。
ここだ。ここが里乃の家だ。

一回、二回。深呼吸をしてからインターホンを押してみる。
胸が高鳴って、呼吸が早くなっているのが自分でもわかる。

…。
もう一度押してみた。

……。
誰も出ない。

おかしいな、留守なのだろうか。
表札には『水嶋』とある。間違いないはずなのだが…。

「あら、水嶋さんのところですか？」

後ろから声がした。びっくりして振り返る。買い物袋をぶら下げた
おばさんがこっちを見ていた。

「あ、はい。でもお留守みたいで…。」

「水嶋さん、もうこの家を出ていかれたわよ？あれはいつだったか
しらねえ…。」

おばさんの話によると、今年に入ってすぐこの家から引っ越してい
ったようだった。子供のいないこの家に、中学生の娘が秋頃から出

入りするようになったと言っていた。

里乃は確かに、ここにいたんだ。

しかし、どこに引っ越していったのかわからず、どうして引っ越したのかもわからないようだった。

さつきまで空を厚く覆っていた雲から雨粒が落ちてきた。

やがて勢いを増した雨は、その場で立ち尽くす僕を濡らしていく。半年間、ずっと大切に持っていたメモ書き。

僕と里乃を結んだ、たった一本の細い線がプツリと音をたてて切れた。

東京駅に戻ったのは深夜になってからだ。最終電車のランプがちょうど消えて、雨に濡れた傘をトンと叩きながら構内の待ち合い室に入った。酔っ払って眠ってしまっているサラリーマン。新聞を黙々と読む中年風の人。ラジオに耳を傾けるお爺さん。近くの喫茶店や立ち飲み屋はまだ営業していて、明かりが消えることはなかった。

みんなこうして始発を待つのだろうか。

雨足がどんどん強くなっていつているようだ。今夜はもう止まないらしい。

あの時、最後におばさんが言っていた言葉がずっと胸に引っ掛かって僕の心を揺らしていた。

（そういえば、娘さんが体調を悪くしたみたいで。一度救急車が来たのよ。）

堅く握り合わせた両手はまるで祈りに似た感情と隣り合わせだった。神様。神様がもし存在するのなら…。

お願いします。

もう会えなくてもいい。

僕なんてどうなったっていい。
どうか…どうか里乃が元気でいてくれれば…。
それだけで…。

堪えきれなくなつた涙が両手の上に落ちた。

返そうと思つて持ってきた幸せの鈴を握り締めて、ただ震えることしかできなかったんだ。

高校の入学式を翌日に控えていたその日、僕は中林先生に挨拶をしておこうと中学校を訪れた。

高校で野球をやるかどうか迷っていること、今までお世話になったこと。

どうしてもこの日に伝えておきたかつた。

いつも怒鳴っていた中林先生は今まで見せたことのない笑顔で僕を職員室に招き入れ、話を聞いてくれた。

人生はまだまだこれから。自分の思ったことを大いにすればいい。

何かあったらいつでも俺のところへ来い。いつまでも、お前には俺と仲間達がいることを忘れるな。

とても暖かい言葉だった。この学校で三年間を過ごせたことを誇りに思う。出会えた人達のことを絶対に忘れない。

また、僕には毎日がやってきて、季節は巡っていくのだろう。でも、これからは大切に日々を生きていこうと思う。二度とこない日を、二度とこない時間を。

かけがえのない人達が、僕にはあるから。

桜が咲き乱れる中庭に出て、たくさんの思い出を歩きながら拾っていった。

野球部での辛かった練習、そー太達とバカやった毎日、里乃が転校してきた時のこと、大きな貼り絵を作った文化祭、クリスマス、夏の大会…。

パズルを組み立てていくよう、心を繋ぎ合わせた。

気がつく、僕は美術室の前まで来ていた。もう部活も終わってみんな帰ってしまったのだろうか。

扉は開いていて、静まり返った校舎に扉を開く音だけが響いた。

（ここが里乃の過ごした部屋か…。）

授業で使う美術室は新しい校舎にあり、ここに入ったのは今日が初めてだった。夕日が射し込む美術室には椅子が無造作に並べられ、描きかけの絵が置かれている。筆や絵の具が散らばっていて、奥にはカメラや彫刻、誰かの絵が飾られていた。

ふと、一つのスケッチブックが目に残った。

水嶋と書かれたそのスケッチブック。

描かれていたのは全て白黒で知らない街の風景だった。ページをめくっていくと、やがて見慣れた場所がスケッチされるようになり、近くの川や山、中学校の校舎が描かれている。

（里乃は、こういう風にいろんなものを見てきたんだな…。）

里乃のお婆さんが優しく微笑んでいる絵、文化祭のくんくん探偵。グラウンドで白球を追い掛けるユニフォームを着た少年。

どうしてだろう。涙が止まらない。里乃の残した思い出達がとても懐かしく、とても恋しいものだった。

駅前のクリスマスツリーのスケッチでページは途切れ、後は白紙のままだった。

スケッチブックをそっと閉じた時、一枚の絵が床に落ちた。

その時僕は、落ちる涙を拭い切れずに、その場に伏せて泣いた。

鮮やかな色のついた、一輪の花が夜空に浮かんでいた。

手を繋いでいる二つの影が、その花を見上げている。

あの時約束した、夏の花火大会。僕が守れなかった約束を、里乃はここに残していた。

裏には『8/17』と日付がうつてあり、里乃の字でメッセージが書かれていた。

『きっと会つても言えなかったと思う。思い出をもらった。幸せをもらった。明日をもらった。だから次は、あなたが幸せになつてほしい。どうか夢が叶いますように。会えてよかった。ありがとう。』

溢れ出る里乃への想いが僕を満たしていく。どうすることもできない。どうすることもできないよ。

里乃に会いたい。今すぐ、里乃に会いたい…。

桜の花びらがヒラリとスケッチブックの上に落ちた。とても綺麗で、透き通った桜色をした花びらだった。

最終色「full colors」

「最近どう？」

「まあ、ぼちぼちな。」

僕が18歳になった夏。この部屋にエアコンが付いた。毎年開けっ放しの窓を今年は開け放ったことがない。

愛用の扇風機は押し入れに封印され、もう使うこともなかった。部屋に入ると同時にエアコンのスイッチを入れる。

そー太が懐かしそうに辺りを見回していた。

「一年振りくらい？」

「もうそれくらいになるか。」

「ほら、去年練習試合で対戦した時だよ。その時に一回来た以来。お前全然連絡してこないんだもん。」

そー太は僕と違う高校に進んでいた。私立の男子校。スポーツが盛んで、そー太もスポーツ推薦で入学。在籍する野球部は二年前、甲子園出場も果たしていた。

川村はというと、女子校の美術学科に進学。まだ二人は仲良くやっているみたいだった。

そー太が寝転がりながら言う。

「公立はなかなか難しいよなー。予選で勝ち進むの。」

「そうだな。やっぱりスポーツクラスのある私立には勝てないわ。」

「お前もよくやったよー。高校からピッチャーに転向なんてさ。」

「まあな。それよりどうなんだよ。予選勝てそうなのか？」

「わっかんないねー。甲子園行きたいけどね。」

そー太が机の上にあったスナック菓子の封を開け、コンビニ袋からジューズを取り出す。

「タカさんとは強いからなー。ダメブランカに可愛い女の子でも呼んでもらって応援に来させようかなー。」

地元で有名な進学校に進んだタカさんは野球と勉強を両立させ、相変わらず真面目に頑張っているそうだ。夏の地区大会予選決勝はタカさんの学校とそー太の学校が対決する。

そうそう、ブランカはそー太と同じ高校に進んだのだが、野球もやらず、毎日不良仲間と夜な夜な街に繰り出しているらしい。それらしいと言えばそれらしいのだが。

「そー太、お前ちゃんと進路は考えてんのか？」

それを聞くな、と言いたげな顔をして苦笑いで答える。

「スポーツ推薦もらえたら大学かな。まだ何も考えてませーん。お前は？」

「俺はもう予備校行って勉強してる。大学に行くつもり。」

「ほお、よくやりますわねーほんと。」

エアコンがだんだん効いてきた。少し寒いくらいだった。

それから二人でテレビを眺め、ゲームをした。こうしていると中学生の頃を思い出す。よくこうやって二人で時間を潰してたっけ。

みんな、進路は別々になっただけど何も変わってない。僕もこいつもあの時のままだ。

「お。中学の時の卒業アルバム発見ー。見ていい？俺失くしちゃってさー。」

「お前、卒アルなんて失くすなよ…。」

そー太とアルバムを覗き込む。こうしてアルバムは開いたのもいつ振りだろうか。

随分長い間、僕は過去との接触を避けていたような気がする。

「あ、中2の文化祭かー！なつかしー！覚えてるよー。お前がさー

…」

そー太はそれだけ言って、再びアルバムに目を落とした。さっきまでの満面の笑みが少し曇っている。

なんだよ気持ち悪い、そう言つと、そー太は遠慮しがちに笑った。

「やっぱ、まだ水嶋のこと…忘れられない？」

「…うん。もう一回会えるんなら、やっぱり会いたいかな。」

本棚の隅に、まるで時間が止まったかのようにあの時の感情が残っている。

東京までの路線図、周辺地図、雨に濡れてくしゃくしゃになったメ

モ書き。

最後に里乃から預かった幸せの鈴。ずっと身につけていたせいで輝きが無くなり、そこに書かれた二人の名前も消えかけている。たった一つの希望を失った東京駅の夜。僕は涙が枯れるまで泣いた。心が軋むほど強く祈り続けた。

もう会えなくても、里乃が元気でいてくれれば。それだけで。そう思っていたはずなのに。里乃のことを想うたび、会いたくなる。どうしても会いたくなる。

（水嶋里乃です。これからよろしくおねがいします。）

忘れられるはずがない。忘れられるはずなんてないよ。
チリンチリン、と小さな鈴の音が聴こえた。

そー太がいつの間にか鈴を手にとって興味深そうに眺めている。

「なんだ、まだ鳴るじゃん。…水嶋もさ、きっと同じだよ。」

「え？」

「お前が願えば、きっと叶うって。この鈴でベスト8まで行ったんだろ？」

そー太はいつもの満面の笑みを浮かべた。

「会えるさ、絶対に。」

その言葉にどれだけ救われただろう。

やっぱりそー太は、そー太のまま。

僕が一番の親友だった。

玄関に散らばる靴の中。

僕はランニングシューズの紐を締めなおした。

「ちょっと川原走ってくる。」

「あら、こんな時間に？明日にしたら？」

「明日はずっと予備校だよ。」

たまにこうして夜になると川原を走ることにしている。時々無性に体を動かしたくなるんだ。予選にあっさり負けて、野球部はもう引退だというのに。

特に今日は、走りたくてたまらない気分だった。

川原に出て、橋を五つ越えたところで折り返し、元の場所に戻る。

（25分か。まだまだいけるな。）

首に巻いたタオルをギュツと締め直し、ベンチに腰掛けた。

さらさらと川の流れる音、虫の声。向こう岸の道路を走る車の音。

今思えば、あつと言う間だった。中学を卒業して、なんとか地元の公立高校に入ることができ、野球部にも入った。変わった環境、そう言えるものはそれほどない。

新しい友達ができた。初めて告白されて、付き合いはじめた女の子がいた。

野球の練習は中学の頃と比べると楽なものだった。

勉強はやはり上手に理解できず、苦手のままだった。

高校に入学すれば当たり前のこと。みんな同じ新しいが待っている。それからはやっぱり日常になって、僕は毎日を過ごしていくのだから。

どんどん僕達には、新しいが入ってきて思い出になっていく。それ

はいつの間にか脚色され、心地の良いものへと形を変えて、心の中で生き続ける。

できれば思い出なんかにしたくはない。ずっとそのまま。そのままの形で覚えていたい。そー太達とバカやった毎日も、中学校でのことも。

里乃と過ごした一年間も。

この手にある時間は、とても巨大な時間は、誰もが同じだけ握っている。

これからも僕達が生きていくために。

この空に下で生きている限り。

きっと僕は、僕達は、明日からもそうなのだろう。

柔らかい風が吹いてきた。とても優しく、懐かしい夏の風。

このベンチで、野球をしている小学生達を二人で眺めていたことを思い出す。

美味しいと有名なアイスクリーム屋で買ったアイスを食べながら。

夏の終わり、一人の転校生がやってきた。男の子だと聞いていたのに、そこに立っていたのは地味でおとなしい女の子だった。

とても優しい子だった。笑顔が可愛い子だった。でも、クラスに上手く溶け込めず、少しずつ孤立していった。

一人でいることが多くなり、時々寂しそうな顔をしていた。

それでも彼女は、一生懸命文化祭の出し物を完成させた。

最初は可哀想だった、からかもしれない。僕は彼女と一緒に文化祭を回った。一緒に映画を観た。初めて彼女の本音を聞いた。

あの時見せた涙が、それからの彼女を強くさせた。美術部に入って、友達もできて。

二人で駅前のクリスマスツリーも観に行った。初めてプレゼントをもらって、僕も初めて誰かにプレゼントをした。

彼女はとても絵が上手だった。まるで写真のよう。僕たちが見た風

景そのままを残すことができた。

この川原で、二人でゆっくり話せたのは夏の始まり。少し肌寒い日のことだった。

堅く結んだ小指と小指。もう明日なんて来なければいい。そう思った。

彼女はいつも笑っていた。いつも僕に笑顔をくれた。

もらった分は返さなくちゃいけない。たくさんたくさん、もらったものが溢れている。

里乃。里乃は今何してる？何を想ってる？

ちゃんと元気でやってるか？風邪ひいてないだろうな。

友達と上手くやれてるか？相変わらず絵は描いてるのか？

心配だよ。やっぱりお前が心配だよ。

きっとお前は大丈夫って笑うんだろうな。わかってる。それがお前の良いところだもん。

花火大会、行けなくてごめんな。楽しみにしてたよな？

結局、お前に何もしてあげられなかったよ。すぐに会いに行けばよかった。すぐに言えばよかった。

相変わらずバカだろ？お前に勉強教えてもらってもバカのままだよ。後悔ばかりしてる。お前のことばかり考えてる。どうしようもない馬鹿野郎だよ。

話したいこと、伝えたいこと。まだまだある。とても一日じゃ伝えきれないと思う。

でも一番にお前に伝えなくちゃいけないことがあるんだ。今までずっと言えなかった。

俺はお前のことが…。

（会えてよかった。ありがとう。）

里乃の声が聞こえたような気がして顔をあげた。
遠くのほうで救急車のサイレンが鳴っている。
向こう岸に立ち並ぶ店の電気が消え始めていた。

今まで気付かなかった。

河川敷に一つの影があつたことを。

淡い光に照らされたその影は、風に吹かれて長い髪を揺らし、夏の夜空を見つめている。

その人は、見覚えのあるスケッチブックを抱えていた。

鼓動が早くなるのをはつきりと感じた。

僕の良く知る面影を残した後姿。

ずっと探していた、ずっと焦がれていたものに似ている。

僕がベンチから立ち上がると同時に、その人は振り返る。

夏が嫌いだった。同じ毎日が嫌だった。周りと同じがつまらなく感じていた。

でも、自分からは何も変えようとしなかった。

ずっと。

ずっと僕はそうしてきた。

いつもと同じ夏。

嫌いだった夏。

あと少ししかない夏だけど、これからきつと好きになれる。

今なら、そんな気がするよ。

それは僕の、初恋だったんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2873d/>

-full color's-

2010年10月10日22時47分発行